

第八章 教育の振興



## 第一節 近代教育へのあゆみ

### 一 明治以前の教育

神道と仏教 大間町の教育の源流を尋ねていくと、日本のどの地方でもそうであったように、神道による教育による教育 と仏教による教育という、日本に根づいた伝統的宗教の場にたどり着く。

既に一七世紀に大間の社堂には、修験道による支配の下に、稲荷宮・勢至堂・天妃権現・弁財堂などがあり、修験者光円坊によって、さまざまな祭祀が行われていたことが知られているし、こうした祭祀や修行の場を通して、人々が広く大きな意味での教育を受けていたであろうことは、容易に想像することができる。

修験道は神仏混交の世界だが、明治時代に入ってから神仏分離政策によって、そのほとんどが神道の系譜に組み入れられ、大間の修験者光円坊の子孫は神官となって、祭祀を司るとともに、学問の道を究める教育者として、人々の崇敬を集めてきた。大間の人々はこの神官たちを「目時の法印様」と呼び、目時左膳・弥市・重丸などの名が今でも地域の人々に親しまれている。

また、『郡内郷村誌』によれば、江戸時代後期に、大間に真言宗の法院があり、そこが修験道とともに、地域の祭祀や広い意味での教育を行う場であったことが記されている。真言密教と修験道との密接なかわりを指摘

するまでもなく、この法院が人々の大きな拠点として存在したことは間違いないであろう。しかしその後、大間地方に禅の曹洞宗や浄土宗など新しい仏教が伝えられ、大間にあった真言宗の古い仏教の寺院は、「禅宗、浄土宗ニ転化スルモノ多シ」（『郡内郷村誌』）という状態になった。この真言宗の法院がいずれの宗派に変わったかは不明である。

いずれにしても、大間において当時の知識人は修験者・神官・僧侶たちであり、「読み」「書き」に関する仕事や教育は、これらの伝統的宗教に携わる人々によって行われていたとみるのが妥当であろう。そして、このような神道や仏教による教育は、江戸末期に入って、大間の無量山阿弥陀寺（上寺）や奥戸の奥川栄光の指導によって実施されていたといわれる、いわゆる寺子屋教育へと結びついていくのである。

**江戸末期の** 江戸末期の大間には、いわゆる「読み・書き・そろばん」に明るい人たちが大勢いた。大間の草寺子屋教育 分けといわれる伊藤五左衛門をはじめとして、大名や近郷の名士の宿泊所として知られる伝法屋や、若狭屋・淡路屋・山崎屋・稲荷丸などの船問屋、さらに漁場などの事業家で、その住まいにくぐり戸のある家の主人たちは、みな相当な知識人であった。

しかし、これらの人々は、大間小学校一〇〇周年記念誌別冊『大間小学校新（真）教育の系譜』によれば、「他国へ行って学んできたものではないようである」と記されている。江戸時代末期ともなれば、海路を通じて、江戸をはじめとする各地への留学も考えられなくはないが、当時の大間の知識人の多くは、大間の地で神官や僧侶に学び、「読み・書き・そろばん」を身に着けていたのである。

古くから海に生きた大間の人々の血流は、その風土に合わせて、神楽や船山などの囃しに見られる独特の文化の伝統をつくり上げてきたように、進取の精神と自力による学習のエネルギーにあふれていたとでもいったらい

いだろうか。そしてこの自力更生の精神は、当然のことながら、教育への深い関心へと結びつくものだった。

当時、一般庶民の学習の場といえば、寺子屋教育が挙げられるが、大間でも寺子屋による教育が盛んに行われていたようである。明確な記録はないが、時代が下って明治六年（一八七三）七月一日、下北郡内のいずれの町村より先んじて大間小学が創立されたとき、その教師として任命された人々の多くは、寺子屋で教鞭をとっていた人たちであった。また、会津藩士だった主座教員田中元長を補佐したのが、上寺の名で親しまれている無量山阿弥陀寺の住職中条忠信であったことを考えると、阿弥陀寺で寺子屋教育が実施されていたことは、ほぼ間違いないだろう。

文書による記録はなくとも、蛭子利三郎氏の話によれば、同氏の父親が寺子屋で学んだという証言もあるし、矢越喜一郎氏の妻が「おじいさんたちの話で、上寺（阿弥陀寺）で勉強したという話を聞いたことがある」という伝聞もあり、いずれも寺子屋教育の実施を裏付けている。

## 二 明治から大正へ

**大間小学校** 大間小学校の創立は、まさに大間教育にとって輝かしい歴史の一ページであった。先にも述べた**の始まり** ように、下北郡内のいずれの町村より早く、しかも新しい独立校舎をもって正式に発足したということは、青森県全体から見ても稀なことであり、特筆されるべきものだったのである。

明治維新によって日本は近代国家として歩み始めたが、政府が行った事業の中で学制発布は、最も重大なものの一つであった。しかし、明治二年（一八六九）の版籍奉還、同四年の廃藩置県、同五年の学制発布と急激に進

む施策の中で、地方の教育行政は、旧態を残したまま、混沌の状態にあったといつてもいい。そんな中で学制発布の翌年、素早く本州極北の地・大間に近代的教育の拠点が開校されたことは、驚異なことだったといえるであろう。

明治維新に泣いた会津藩の人々が遠く下北の各地に流され、会津藩稽古館・日新館などの教育の伝統を継ぐ田中元長が大間小学の主座教員として任じたことも大きな力だったが、何よりもこの大間に生きる人々の向学の精神が底流にあつてこそ、下北郡内最初の小学校誕生の力となつたことはいうまでもない。

教科も綴字・習字・単語読方・洋法算術・修身口授・単語暗誦・会話読法・単語書取・読本読方・会話暗誦・地理読方・養成口授・会話書・読本論語・究理学論講・書読の各科を温習するとなつていて、八級から始まり一級で修了とする堂々とした編成である。各級の修業期間は六か月で、卒業するまでには四年を必要とする下等小学であり、上等小学は設けられなかったとはいうものの、各級修了の認定には厳正な試験を通過しなければならなかつたという。

しかし開校当時の大間小学に学ぶ児童数は、男児三四名、女児二名であり、授業内容も実際には、ほとんどが「読み・書き・そろばん」の三教科で、寺子屋教育の延長からのスタートだった。『大間小学校新(真)教育の系譜』によれば、「当時、制定された各教科を指導し得る教員は、全国的にも稀なるものであつたと見るべきで、洋法算術、地理読方、究理学論読等は、その後、師範学校を卒業した先生によって指導がなされるようになったと見るべきである」と記している。

**存亡の危機** 明治期の大間小学校は、校舎も教員も、そしてその教育内容もさまざまに変遷し、近代的学校教  
**乗り越えて** 育へ向けて苦闘していく。明治政府は「我が国の発展は国民の教育にあり」とし、特に「東北府

梶連ニ学校ヲ設ケ御趣意貫徹候様尽力可致旨被仰出候但学校取調トシテ東京学校ヨリ人選ヲ以差向候間商議可致事」(明治二年発布「府県施政順序」と東北地方に注意を促してきたが、大間小学校の歩みには、さまざまな苦難の道があつた。

初代主座教員田中元長は、創立後二年の在任で郡役所勤務となり、これを補佐していた阿弥陀寺住職中条忠信も明治九年(一八七六)には同校を去る。二代目主座教員には、やはり会津藩士だった今村奎治が就任、教員新田角太郎、補助教員武内豊太郎が児童たちの指導に当たつた。そして明治十八年、三代目主座教員田中巳代馬の時代に、大間小学校に大きな災難が襲つた。二月二十日午後八時二十分、校舎校具のすべてを全焼した火災がそれである。

明治十年に校舎の北側に増築した教員の居宅も焼け、児童も教員も寒空の下にさらされ、ただちに仮教場を設けて授業を開始したといふものの、田中巳代馬が引責辞任。主座教員を欠いたまま、山田勝衛・橋沼賢蔵・東繁松らの補助教員が就任したが、いずれも任期は短く、教授者欠員のため休校状態になつたこともしばしばであつた。この大間小学校存亡の危機を救つたのは、惣代・竹内伝兵衛、米沢小太郎を中心とする大間村民の教育に対する熱意である。学校焼失後、村民は一致協力、二年後の明治二十年には、焼け跡を避けて、現在の役場のある位置に新校舎を建設し、宮浦岩五郎主座教員を迎え、堂々とした大間小学校の再興をなし遂げたのだつた。

そして明治二十一年八月、改正小学校令による大間尋常小学校第一回卒業生が新校舎から送り出された。木村重三・七島豊太郎・羽生三郎の三名である。いずれも豊かな家柄に生まれ、勉学に熱心な児童だったが、大間小学校の歴史上、最大の苦難の時期に在学した人々であり、その個人的な努力もさることながら、大間村民の学校再建の熱意が生み出した卒業生だつたといえるかもしれない。

いずれにしても、明治期の大間小学校は、その歴史上、在任期間最長の宮浦岩五郎主座教員のもと、村民の熱意と児童の努力によって再興され、さらに近代的学校教育をめざしての第一歩を歩み始めるのである。

**脱寺子屋から** 明治期の教育制度は、決して不動のものではなく、めまぐるしく変化して、地方教育行政や現代的教育へ 場の学校は、その対応に苦慮する。小学校の呼び名そのものも、上等小学、下等小学から小学校を初等科（三年）、中等科（三年）、高等科（二年）に分けたり、明治十九年（一八八六）の小学校令改正により、修業年限四年の尋常小学校とするなど、紛らわしいほどに変わった。

学区制や教科目に至っては、明治十二年に勅令によって学区制が廃され、教科目の整理などが行われたが、翌年にはまた学区制を復するなど、さまざまな試行錯誤が繰り返されている。いずれもいかに就学督促の効を上げることがその目的だったが、当時はまだ義務教育とはいっても、家事手伝いそのものが教育だった時代であり、制度の改革がしばしば行われても、就学する児童は少なく、授業内容も寺子屋の域を出なかつたことは、先にも述べた通りである。

下北郡内最初の小学校である大間小学校でも、それは例外ではなかつた。ようやく近代教育への道を歩み始めたのは、全焼後に新装なつた校舎で新しい教育を受け、訓導の資格を持った宮浦岩五郎主座教員の尽力による学級編成、教科教員の整備の成果が上がり始めた明治二十年代後半からだといわれる。

その宮浦岩五郎訓導は、明治二十九年、有志の寄付によるオルガンを大間小学校の音楽教育の基礎にするため、日々の激務の後、三〇キロ余りの道を隔てた大畑村へ奏法の勉強に通い、過労による突然の死を迎える。しかし、この近代教育への情熱は、後に続く大間小学校の教員たちに受け継がれていった。以下、大間小学校がたどつた近代教育への歩みは次のとおりである。

- 明治二十九年十一月 山内平八訓導兼校長就任。
- 明治三十年四月 二学級編成認可、補修科を正教科児童と併せて教授することも実現。
- 明治三十年八月 教員室・物置・便所の付属建物とともに増築校舎完成。
- 明治三十一年六月 修業年限四年の高等科併置認可。補修科を廃止。
- 明治三十四年八月 山内平八校長の転任により、田中幸次郎校長就任。
- 明治三十五年四月 三学級編成実施。
- 明治三十六年八月 女兒のために裁縫科教員を置き、授業を開始。
- 明治三十七年四月 児童数増加著しく、四学級編成へ。
- 明治三十九年十二月 大間水産補習学校付設認可、授業開始。
- 明治四十年四月 児童増加著しく、全校五学級のうち高等科一学級を除き、二部教授となる。同年六月、校舎新築工事着工。

**奥戸小学校** 奥戸小学校の創立は、大間小学校の開校から一年後の明治七年（一八七四）六月二十日のことでの始まり あり。当時の奥戸村は、青森県の大区小区制によって大間村・佐井村・長後村・蛇浦村・易国間村とともに第六大区（下北郡）第四小区に併合されていたとはいうものの別々の自治体であり、教育においても独自の伝統があった。

大間より古く、奥戸の春日神社は越後（新潟県）や能登（石川県）との交流が深く、独特な文化を伝える拠点であったし、その別当として管理した山伏金剛院正信は、念力自在の法印として知られる。森勇男は『下北半島の歴史と芸能』によれば、奥戸神楽は「どうみても下北半島の各地に残る山伏神楽の系統ではなさそうだ。やは

り奈良の春日大明神の流れをくむ春日神社であつてみれば、神樂も京都、奈良のものであらうと考えられた」と記しているように、奥戸には、他の下北各地とは異なる文化の伝統、ひいては教育の場があつたといえる。

時代が下つて江戸末期の寺子屋教育においても、奥戸の方が大間より明確な寺子屋の教育の系譜がある。大間の場合は、上寺と呼ばれる無量山阿弥陀寺で寺子屋教育が行われていたという証言や伝聞があり、その必然性は十分に認められるが、奥戸の場合は、天保五年（一八三四）奥川栄光によつて寺子屋教育が始められたという記録があり、その開設は下北郡内はもちろんのこと、青森県内でも古いものである。学制発布による公立小学校の創立は、大間小学校の方が先だったが、奥戸では、それに見合う充実した寺子屋教育が実施されていたのである。奥戸小学校は、このような奥川栄光によつて始められた寺子屋教育の延長線上、または発展的な基盤の下に誕生したといつていい。春日神社の石段右側の下にあつた奥川栄光の長男奥川左居の自宅（現在、佐々木多喜郎氏宅）で行われていた寺子屋が、そのまま仮校舎としてのスタートであつた。その名称は、奥戸簡易小学。明治政府はこの年、学齡を満六歳から満一四歳までと定め、さらに明治十二年、小学校の課目を読書・習字・算術・地理・歴史・修身の六課目とし、義務教育年限を一六か月に縮小する教育令を制定したが、奥川左居が自ら教鞭をとる奥戸小学校は、中央政府の動きにそれほど影響を受けることなく、奥戸の教育を確実な足どりで発展させていったのである。

#### 歴代校長と

奥戸小学校が春日神社の石段右側の奥川左居宅から離れて、奥戸崇徳寺墓地に校舎を新築したの

#### 村民の熱意

は、明治十六年（一八八三）七月のことであつた。記録は残されていないが、奥戸簡易小学が創立されて以来、年ごとに就学児童が増加し、個人宅の仮校舎だけでは収容できなくなるほどの発展をみたからだと

といわれる。

新しく建てられた校舎は、二教室・二学級編成となり、校名も奥戸簡易小学から「簡易」の二文字を取り、奥戸小学とされたのも、寺子屋的教室からの脱皮を示すものであろう。大間小学校が二学級編成の認可を受けたのは、明治三十年のことだから、遅れて開校した奥戸小学の方が早く二学級編成を実施していたことになる。

明治十九年の小学校令公布により、小学校が尋常・高等の二科となり、尋常科四年を義務教育と定めたため、奥戸小学校も奥戸尋常小学校と改称され、以後、めまぐるしく近代教育への道を進み続けた。

明治期の主な動きを抜粋してみると――。

○明治三十四年 高等科を併置し、奥戸尋常高等小学校と改称。

○明治三十五年 一教室増築。尋常科二教室、高等科一教室の三学級編成。

○明治三十六年 女兒のために裁縫科を尋常科三年以上に加える。

○明治三十七年 補修科を設置。尋常科・高等科に「唱歌」を加える。

○明治三十九年 材木地区に分教場を設置。尋常科のみとする。

○明治四十三年 高等科に農業科目を加える。

○明治四十四年 奥戸字館の上九六ノ一ノ五に二階建て八教室の校舎新築、移転。

○明治四十五年 四学級編成実施。

以上のように、ざっと眺めただけでも、奥戸小学校の発展には目覚ましい勢いが見られる。その間、日露戦争が勃発したり、三六戸を全焼するという奥戸大火などの厳しい時代背景の中で、奥戸小学校を支え、前進させたのは、歴代校長、教職員、そして奥戸に住む人々の教育に対する熱意であった。

小笠原祐八・角田岩太郎・佐藤貞幹・千葉稻城・吉川勝美という初代から五代の学校長が明治期の奥戸小学校

を率いた人たちが、これらの校長の着任、離任、勤務年数などの記録は残されていない。しかし、古く江戸時代から確立していた寺子屋教育の伝統を受け継ぐ奥戸の人々の教育への情熱が、歴代校長を動かし、近代学校教育を盛り立てる推進力となったのであった。

**奥戸小学校の** 材木分校の開校は、奥戸小学校の歴史を語る上で欠かすことのできないエポックである。いや、**材木分校設置** 明治三十九年（一九〇六）に奥戸尋常高等小学校材木分教室として認可発足したときは、既に町村制施行によって、大間と奥戸は合併して大奥村になって一七年余りを経過していたのだから、奥戸だけではなく、大間町の前身・大奥村全体の大きな出来事だったといっている。

もともと材木地区が集落として形成されたのは大間・奥戸より古く、巨岩・巨石によって守護された大間町最古の居住地である。また古くから農耕用の用具ばかりではなく、武器を生産する鍛冶屋があったことから、武士の居住地としても知られ、ここに大きな文化や教育の場があったであろうことも考えられる。

しかし地理的に辺境であることと、居住者が大間・奥戸に比べて少数であることから、時流に取り残された小集落の印象がないではなかった。奥戸小学校が開校しても、そこに材木地区の児童が通学したという記録は残されていないし、大間と奥戸が合併し、材木地区が大奥村の一部に編入されてからも、学校教育の場とは無縁だったのである。つまり、材木分教室が設置されたことによって、大奥村は、初めて全村の児童に学校教育の場を与えることができたのだった。

だが、それまで材木地区に教育の場が全くなかったのかといえ、そうではない。先にも述べたように、古くから武士の居住区であったことを考えれば、むしろ教育としては高度なものが行われていたとみるべきで、事実、寺子屋教育は、奥戸の奥川栄光の寺子屋と同時期から材木でも行われてきた。

大奥村立奥戸尋常高等小学校材木分教室が開校したのも、材木地区で開かれていた寺子屋式の塾「材木特別学級」が母胎であり、最初の校舎も、その塾である佐々木重造氏の自宅である。

校長は奥戸小学校の歴代校長が兼任する形をとり、分教室には主任が置かれた。明治期の主任名には、初代・成田一元、第二代・荒川剛、第三代・蛭子小五郎の名が挙げられているが、いずれも着任、離任、勤続年数などは定かではない。また、この分教室には、尋常科だけしか置かれず、高等科は本校の奥戸小学校まで通わなければならなかった。

### 三 大正から昭和へ

**西洋式近代** 明治天皇の崩御により、時代が大正の新しい年号を迎えたとき、大間町の前身大奥村は、大間・校舎の建設 奥戸・材木の三地区を合わせて、総戸数四一二戸、総人口三一五七人を擁する下北半島有数の教育村となっていた。

下北郡内のいずれの町村より早く大間小学校を開校させ、大間・奥戸・材木の三地区を合わせた大奥村の誕生後は、奥戸小学校に材木分校を設立し、全村的に江戸期からの寺子屋教育の伝統を受け継ぐ新時代の学校教育を展開してきたことは既に述べたが、その熱心な教育への歩みは、大正期に入ってさらに前進する。

特に奥戸小学校は、大正三年（一九一四）、四年と連続して、学齡児童の就学・出席成績良好により郡衙（郡役所）から賞金を受けるなど、下北郡を代表する優良校となっているが、何といっても大奥村の熱心な教育への取り組みを象徴するものとして挙げられるのは、大間・奥戸・材木各地区の教育施設の充実であろう。既に町村

制施行によって大奥村が誕生した直後から、これまでの寺子屋の延長のような校舎を近代化的な西洋式校舎に建て替えようという運動が起こり、明治四十年代に入ると、それが着々と実行に移されていった。

明治四十一年（一九〇八）一月に新築落成した大間小学校は、大奥村大字大間字狼丁の一五四〇坪の敷地に二階建て総ベッキ塗りというモダンなもので、職員玄関にはバルコニーまでであるという近代建築に衣替えする。奥戸小学校も明治四十四年十月に、大奥村大字奥戸字館の上に二階建て八教室の近代的な校舎を新築、大間小学校に勝るとも劣らない教育の拠点をスタートさせた。そして大正四年四月には材木分教場も新築し、全村を挙げて教育の現場の充実を実現させたのである。

これらの近代的校舎は、さらに児童数の増加に伴い増改築が繰り返されたばかりではなく、図書館などの施設も付設されるようになり、児童・教員ばかりではなく、村民全体の文化の中心的存在となっていた。

**大正デモク** 大間町の前身である大奥村が、明治から大正へという時代の移り変わりとともに近代的な教育村  
**ラシー教育** として発展し続ける姿は、これまで述べてきたように、本州最北端という僻地にもかかわらず近代的な教育施設の充実に象徴されるが、単に校舎・図書館・体育館などの外面ばかりでなく、豊かな内容を伴うものであった。

明治期の教育は、ともすれば先進諸外国の教育のあり方をそのまま受け入れるのに急な面があったが、大正期に入ると、諸外国の長所を生かし、国情に合った教育を普及しようという安定期に入る。しかしこれも第一次世界大戦の勃発により、大正四（一九一五）～五年のころには軍国主義的な傾向が強くなった時期もあったが、大戦の終結とともに再び平和な安定を取り戻す。そして花開いたのが、大正デモクラシーと呼ばれる欧米的な民主主義の色濃い教育であった。

このような背景のもとに、大奥村の教育も創造教育・自由教育とでもいった情操豊かな内容を持ち、大きな成果を挙げている。『大間小学校新（真）教育の系譜』によれば、歴代校長を紹介しながら、明治・大正・昭和の大間小学校の教育が詳しく述べられているが、中でも大正期の工藤正輔校長時代の一節に、次のような記述があるのが興味深い。

「六年生に郡視学主催の学力試験が一斉に行われたのもこの頃であつた。工藤校長は余り熱心ではなかつたようなので、生徒への影響は少なく、のんびりと勉強させてもらったものだった」。つまり、点取り虫のような詰め込み教育ではなく、スポーツや音楽、美術といった楽しく、自主的に行う学習が伸び伸びとした児童を育てていたのである。

スポーツでは野球が盛んで、用意されているグローブの数こそ少なかつたが、それを奪い合つて野球を楽しんだり、師範学校を卒業したばかりの新任教師のオルガンの演奏に聴き入つたり、それまでの手本を見て描く、そつくり絵の授業から、自由に描く写生画の指導を受けたりする記述は、大奥村の大正デモクラシー教育のあり方を余すところなく伝えている。

もちろん、これに合わせて主要科目の学業も充実させ、奥戸小学校では大正七年に実業補習学校を設立したり、四年生に理科を加えるなどの措置を講じているし、大間小学校では理科実験室の設備を整えている。このような「よく学び、よく遊べ」という環境から巣立つた児童たちは、青森師範、青森女子師範、青森中学、函館師範、函館中学、函館商業、函館工業など、青森・函館両市内の上級学校へ進学する者も少なくなかつた。

**郷土に根** 大正デモクラシー教育とともに大奥村の教育の中核となつていたものに、郷土に根ざした教育と**ざす教育** いう基本方針がある。これは本州最北端の厳しい自然環境に生き抜いてきた人々のたくましい郷

土愛の発露として当然のことといえるが、この根本的な教育方針は、大正から昭和に至るこの時期に確立されたものでもあった。

大正十二年（一九二三）から奥戸小学校に、昭和五年（一九三〇）からは大間小学校に存在した鎌田東洋校長は、奥戸小学校時代に奥戸青年訓練所や奥戸少年団設立に尽力し、大間小学校に移ってからは少年火防衛生隊の組織をつくり、各班ごとに村内の火防衛生を競わせたりした。また、高学年生と先生とが浜に打ち上げられる昆布拾いをすることを奨励し、その昆布を業者に卸して体育施設や用具の整備に充てるなど、地域に即した活動から生まれる大きな教育効果を促進したのである。

そして昭和八年、大畑小学校へ転任した鎌田校長の後に、三戸郡名久井小学校から大間小学校へ赴任した盛寿校長によって、さらに大奥村の地域に根ざす教育は、小学校教育の基本方針として定着した。昭和九年に制定された学校経営方針の冒頭には、次のように明記されている。

「地方ノ実情ヲ洞察シ本校ノ歴史的関係ヲ重視スルコト」

これは盛寿校長が常に主張した「人は大自然の子、郷土はわれらの母」という考えから生まれた教育理念であり、「われらは、われらが住む郷土の実相をさぐり、郷土のもつ特色を明らかにし、これを教育上に活用すべきである」という信念でもあった。

このような郷土に根ざす教育の推進は、当時の大奥村の二小学校、一分教場の記録を眺めるだけでも、大きな成果をもたらしている。

○昭和八年六月 大間小学校で県主催の青訓指導者講習会開催。

○同八年八月 大間小学校で下北郡処女会大会開催。

- 同九年八月 大間小学校で大奥村主催の漁民道場開催。
- 同九年九月 大間小学校に大間北日本博物館を設立。
- 同十年五月 大間小学校で大間教育『自立更生の原理』を発行。
- 同十年七月 奥戸小学校材木分教場新築。
- 同十一年四月 大間北日本博物館付属植物園開園。
- 同十一年八月 奥戸小学校で「郷土体の診断」を作成。
- 同十二年 奥戸青年学校開設（実業補修学校と青年訓練所を統合）。

#### 四 戦時中の教育

日中戦争から 昭和十二年（一九三七）に勃発した日華事変から、日本の教育は一挙に軍国主義教育一色に塗  
太平洋戦争へ りつぶされる。既に大正末期からその気運は徐々に高まっていたが、この日華事変を機に翌十  
三年の国家総動員法の施行、さらに同十五年の日独伊三国同盟と続き、ついに同十六年の太平洋戦争開戦によっ  
て、日本全体は戦時下の非常体制に組み込まれていったのである。

それは、日本の最北端の大間町においても例外ではなかった。既に昭和十三年に下北半島は戦時に備えて要塞  
地帯となり、拡大の一途をたどる日華事変に対して満蒙義勇軍の渡満が相次いだ。そして好むと好まざるとにか  
かわらず、教育の上にも戦時色が色濃く反映するようになる。教員や青年学校生徒たちの入隊をはじめ、学制改  
正による各小学校の国民学校への改称など、戦時体制は着々と進められ、太平洋戦争開戦の翌年昭和十七年十一

月、大奥村は町制施行により大間町として新しいスタートを切ったのであった。

この日華事変から太平洋戦争の時期、大奥村―大間町の教育を支えたのは、大間小学校では間宮尚校長・森寅吉校長であり、奥戸小学校では森寅吉校長・小島三郎校長・二本柳嘉一郎校長である。特に森寅吉校長は奥戸小学校から大間小学校へと、両校の校長を務め、昭和五年から十九年の一五年間にわたって、大奥村―大間町の激動の教育状況の中で郷土を支えた人であった。

この難局の中で、各校長先生をはじめ各教員、そして大奥村―大間町の郷土に生きる教育熱心な父兄たちは、時勢に合わせながらも各小学校の充実発展を推進する。

大奥村大字奥戸字二股山の国有林を五〇年間無償借入し、皇紀二千六百年記念勤労奉仕造林を行ったり、町制施行後は町有地一町五反歩へ大東亜戦争記念植林をするなど、豊かな郷土づくりを行うほか、各小学校の施設の拡充整備も積極的に行われた。大間小学校では映写機が購入され、映写会が行われたり、奥戸小学校では校舎をトタン屋根に葺き替え、低鉄棒五基が校門横に設置されたのもこの時期である。軍国色に塗りつぶされようとしていた日華事変から太平洋戦争のさなかにあっても、大奥村―大間町の教育は、豊かな自然づくりと健全な児童を育成する、郷土に根ざす教育が生き続けたのであった。

**学徒隊の結成** 太平洋戦争の開戦当初は、破竹の勢いで進撃を繰り返した日本軍も、やがて圧倒的な物量で反**と終戦への道** 撃する米英軍によって劣勢に追い込まれ、昭和十九年（一九三四）に入ると、その敗色は日ごとに色濃くなっていた。

大間町の教育にもその影響は大きく、訓導の海兵団入団や現役入営などが見られ、ついには少年団を解消して学徒隊の結成にまで事態は進展する。郷土大間町の地域に即した活動を続けてきた大間海洋少年団や奥戸少年団

を、大戦の子備兵士としての集団に編入しなければならぬほど、戦況は切迫していた。

しかし、この学徒隊の結成による臨戦体制もわずか一月余りしか続かなかつた。日本全体が学生・生徒の軍事教育を強化し、満一八歳以上の兵役編入を打ち出し、戦時教育令が公布されたというものの、昭和二十年に入ると、米英軍の進撃は既に本土へ大きく迫っていたのである。

直接、米軍機による空襲で大きな被害に遭ったのは奥戸国民学校であった。昭和二十年七月十五日午後三時四十分、突如来襲した米軍機が校門左側に二五〇キロ爆弾を投下、校庭や校舎に大損害を与えたのである。幸い人命に被害はなかつたが、本州の最北端に位置する大間町にも生々しい戦禍の爪跡が残されたのである。食糧や木の増産校として県知事の表彰を受け、体操場を海軍兵舎として提供していた奥戸国民学校は、これによって日々の授業も満足に行われないほどの状況となった。

戦禍ではないが、それより先、大間国民学校も思わぬ災害を受けていた。昭和二十年二月二十六日午後八時四十分、大間地区に発生した火災は、風速一五メートルの西風にあおられて六八戸を焼失する大火災となったのである。罹災児童は九八名に及び、これまた十分な授業ができるような状態ではなかつた。つまり終戦直前の大間の国民学校は、火災と戦禍のダブルパンチに見舞われていたのである。

極北の地・大間町さへこの状況だったのだから、日本の主要都市の惨状はいうまでもあるまい。相次ぐ空襲や艦砲射撃、ついには京都青森の大空襲、そして広島への原爆の投下——。これによって不滅の神州・日本は、ポツダム宣言の受諾、無条件降伏への道をたどらなければならなかつた。

## 五 戦後の教育

敗戦処理と 昭和二十年（一九四五）八月十五日、大東亜戦争終結の大詔が発せられると、日本の歩む道は一混乱の日々 八〇度の大きな転換を見せる。そしてそれは、単に軍国主義から民主主義への変動と呼ぶには、あまりにも多くの混乱と苦難を伴うものであった。

大間小学校百周年記念誌別冊『大間小学校新（真）教育の系譜』には、「敗戦への道」と「敗戦処理」と題された次のような一文が掲載されているが、これは当時を知る人にとっては、切実で率直な感慨であったろう。

敗戦への道、日本国民が未だ且つて経験したことのない敗戦への道、これまでの教育方針そのものも進むを知って退くことを知らぬ教育であったのである。それはある意味からすれば、歴史の流れの本質を知らぬ考えであったかもしれない。それだけに責任ある位置にあった方々の苦悩は、はかりしれないものがあったろうと思われる。（中略）御真影の奉還、奉安殿の破壊、修身、国史等の大東亜戦争に関係ある文書、図書等の整理など、多くの先輩が長い年月をかけ、それなりの理由があつて作られ、備えつけられた物が、一片の通牒により、罪ある物として、悪の烙印を押されて廃棄され、壊されていくのであった。恐らく、心ある者の涙を禁じ得ないものがあつたことと思う。（後略）

また、大間小学校の当時の記録によれば、多くの教職員の人事異動、変遷が見られる。

○昭和二十年八月 終戦により清藤豊・今田武信・浜田君春・佐々木強・遠藤賢治の各先生が復員す。

○同年九月 奥島市太郎教頭、正津川国民学校訓導に命ぜられ、堀内金雄訓導、大間国民学校教頭に任せられる。

○同年十一月 森寅吉校長退職。大湊国民学校の山内啓介校長、大間国民学校校長に任ぜられる。

○昭和二十一年一月 山内啓介校長、青森県教職員適格審査委員会より不適格とされる。

○同年二月 堀内教頭、大間国民学校校長代理を命ぜられる。

○同年八月 大日本教育会青森支部解散。

このような大間小学校がたどった混乱の時代の波は、奥戸小学校にも同様に打ち寄せていたが、小島三郎校長の後を引き継いだ佐々木喜代吉校長のもと、奥戸小学校には、戦火によって被災した学校そのものの修復が急務であった。関係者一致団結して震災校舎の修復落成にこぎつけたのは、終戦二か月後の十月十六日のことである。そして翌年三月、国民学校として最後の修了式がこの校舎において行われたのであった。

**六三三制実施と** 終戦によって日本の教育の制度も内容も次々に変革されていったことは、あらためて述べる

**新教育への模索** までもないが、まず最初に行われた戦後教育への施策は、修身・国史・地理の教科書の使用

中止である。

何をどのように教えるか、現場の教師たちは教科書を奪われ、これまでとは全く違う教育を模索しなければならなかった。米国から第一次教育使節団が来日、教育勅語の奉読廃止が決まっても、新しい教育への支柱は決められず、昭和二十二年（一九四七）に入って教育基本法・学校教育法が実施されるまで、日本の学校教育は、ほとんど空白の状態にあったといえる。そして新教育制度・六三三制の実施によって、ようやく新しい時代の教育基盤が確立するが、それでもなお、多くの混乱の中でさまざまな模索が繰り返されるのである。

大間町の教育現場の人々も、終戦直後から新しい時代の新しい教育を求めて、何をその根本にするかの真剣な検討が行われていた。そんな中で奥戸青年学校の目時正五郎教官は昭和二十二年三月、かつて奥戸小学校の教育

関係者の間で広く読まれていた小原国芳の著作『教育立国論』に啓発されて上京、玉川学園の小原のもとに滞在する。

戦前戦後にかかわりなく、教育の中核とすべきものは何か、それは自学自習の全人教育を提唱する玉川学園小学部の教育の中にあるとの確信のもとに、目時正五郎教官は約一か月間、同学園で研修を続けた。そして、その研修中、大間国民学校主席教官に任命されたとの報を受け、四月上旬に帰任する。それは、国民学校が廃止され、新しい教育制度である六三三制のもと、大間・奥戸両国民学校が大間小学校・奥戸小学校としてスタートしたばかりのことであった。

その後も全人教育の理想を求めて、目時正五郎教頭の再三にわたる上京研修は続けられ、大間小学校ばかりでなく、新教育の下北地方の実験校として指定された大平小学校・易国間小学校などで具体的に実践される。また進駐軍の命令によって、青森県ではしばしば新教育の講習会が催され、敗戦後の新しい教育への模索は、ようやくおぼろげながらもその形を整えつつあった。

大間小学校は佐々木喜代吉校長、奥戸小学校は中島七郎校長のこの時代は、このような新教育に対する暗中模索の時代であったが、大間町の両校は大きな理想の教育を求めて、一步一步前進し続けたのである。

**新制大間中** 六三制の新学制によって大間町に新制大間中学校が誕生したのは、昭和二十二年（一九四七）四月二十一日のことである。だが、あらためていうまでもなく、当時は人々の生活は衣食住にも事欠く状態にあり、ほとんど名ばかりのスタートだったといっても過言ではない。

新制中学校といっても、新しい校舎が建設されたわけではなく、大間小学校の旧高等科がそのまま中学校となつたという仮住まいであり、校長も初代こそ土佐勇太校長を迎えたといふものの、わずかが在任一年で大間小学校

の佐々木喜代吉校長が兼務するという体制を余儀なくされていた時代であった。大間中学校が名実ともに独立した校舎を持つ新制中学としての体制を取るようになったのは、三代目の吉川美二校長が就任した昭和二十三年七月十六日以降となる。

それに先立って、一日も早く独立校舎を持つ中学校にという関係者の活動によって、昭和二十三年四月には、旧軍隊の古い兵舎を改修した独立校舎が完成し、そこでの学習がスタートしたが、兵舎であったため天井は低く、教室内は暗く、床もコンクリート叩きのままであり、寒さが身にこたえ、十分な設備を持つ新制中学校の校舎の新築が待たれる日々が続いたという。今ではその面影もないが、要塞後地であったため、砲台や弾薬庫などの残骸や砲弾の破片なども散在し、タコ穴と称する、人間一人は楽に入れる大きな穴があちこちに掘られているような校庭だったのだから、その危険な状態が容易に想像できる。

待望の新校舎が完成したのは、昭和二十六年七月十八日のことである。このころになると危険だった校庭も整備され、黒松の林の丘に立つ新築校舎は、まさに新制中学校を象徴するものとして輝く存在となった。ちょうど日本も戦後の混乱からようやく立ち直り、朝鮮動乱による特需景気も反映して、全国的に復興の槌音が高まっていた時期である。真新しく、檜の香りのすばらしいこの新校舎は、そのまま日本の歴史を表現していたといってもいい。

**新制奥戸中** 大間町立奥戸中学校の開校も大間中学校と同じように、校舎の独立、新校舎の建設という歴史を**学校の開校** たどらなければならなかった。また、その前に奥戸中学校は大間中学校の奥戸分校としてスタートしており、奥戸中学校と呼ぶ独立した新制中学校として発足するのは、昭和二十二年（一九四七）十一月二十五日からという歴史もある。

大間中学校の分校だった六か月余りも、奥戸中学校として独立してからの五か月間も奥戸小学校内に併置された二学級編成であり、昭和二十三年四月から三学級編成、翌年四月には五学級編成となったというものの、独立した新校舎はなく、奥戸小学校に仮住まいの日々であった。しかし、初代中島七郎校長をはじめ、教育熱心な奥戸・材木地区住民は、中学校の生徒が増加することを見込み、昭和二十三年八月二十日に住民大会を開いて奥戸中学校校舎の新築を決定する。そして翌年四月に新築の許可が下りると、六月着工、七月上棟式と急ピッチに作業は進められ、十一月三日に竣工、同二十日には屋内体育館も完成、その翌日には移転を始め、十二月五日には奥戸中学校校舎新築落成式を迎えた。

このことは、当時としては『世紀の大事業』だったといわれる。地区住民によって新校舎新築の決定がなされて以来、奥戸中学校建設委員会が組織され、各委員の活動と地区住民の協力は、現在でも関係者の語り草となっているほどである。また戦後の混乱が残る中で、特に財政的な面での苦労には大きなものがあつた。それだけに、天狗山を背景に下北郡下でも自慢できるほどの新校舎が完成したときは、住民たちの喜びは大きかった。新築落成式に次いで開かれた校舎新築を記念した学芸会や展覧会は、数々の障害を乗り越えて独立新校舎の夢が実現した喜びを味わう人々で大盛況を見せたという。

そして昭和二十五年三月、奥戸中学校は、男子一名、女子六名、計一七名の第一回卒業生を、現在にまで至るこの新校舎から送り出したのである。これらの目覚ましい活動実績によって、奥戸中学校建設委員会は同年十一月三日、文部大臣から表彰されている。

**県立大間高等** 県立大間高等学校の歴史も、大間・奥戸両中学と同様に大間町民が一九二〇年（一九二五）四月一日、下北郡**学校の草創期**の成果をつぶさにかがわせる内容を持っている。昭和五十年（一九七五）四月一日、下北郡

部としては最初の全日制県立大間高等学校が創立されるまでには、悲願ともいえる町民たちの情熱的な歩みがあったのである。『大間町町制施行五〇周年記念誌』によれば――、

○昭和二十三年四月一日 田名部高等学校大間分校（定時制）開校。

○昭和四十九年四月十一日 田名部高等学校大間分校（全日制）発足。

○昭和五十年四月一日 県立田名部高等学校大間分校が県立大間高等学校に昇格。

と、その歩みが簡潔に記されているが、最初、県立田名部高等学校の分校、それも定時制としてスタートした大間高等学校が、全日制の県立大間高等学校として独立するまでには、四半世紀に余る長い歳月が必要だったのである。

いや、実は県立田名部高等学校の所属となるまでにも、さまざまな曲折があった。昭和二十三年六月に定時制の分校設置認可とともに、山崎謙三分校主任が着任したとき、大間分校はまだ所属は正式に決まらず、とりあえず大間小学校内に分校を置き、七月二日に一教室を使って授業を開始する。そしてその三日後に県立田名部女子高等学校の所属が決まり、翌二十四年三月三十一日までこの体制が続くのである。

いづれにしても、定時制高校大間分校は、大間小学校に校舎を置く、ほんのささやかなスタートであった。昭和二十六年七月に新装成った大間中学校へ校舎を移転し、翌二十七年四月に第一回前期修了式を行ったが、修了生はわずか五人にしかすぎない。昭和二十九年三月第一回卒業証書伝達式の折の卒業生も、四人という小人数である。しかし、当初、小学校の一教室で始められた授業は、年を追うごとに充実し、昭和二十四年には三教室、同二十七年には四教室、同二十八年には五教室を使用するようになり、いよいよ大間高等学校独立の気運は高まっていた。

**独立高等学校** 大間高等学校の独立は、単に大間町民だけの願いではなかった。本州最北端に位置する大間町へのあゆみを頂点として、北通り三か町村の住民全体がそれを願ったのである。地域の発展を教育に託して、人づくり・町づくり・村づくりに情熱を持って取り組む人々の熱意は、やがて大間高等学校独立期成同盟会の結成という具体的な行動へと結びついていった。

昭和二十九年（一九五四）十二月十四日、北通り一町二か村の住民たちは独立期成同盟を結成すると、ただちにまず独立校舎の建設へ精力的に活動を開始する。そして小学校から中学校への仮住まいから、独立した校舎での高等教育の実施を願う住民パワーは、一年足らずのうちに中学校のそばに独立校舎を完成させて、中学校からの移転を実現させた。

しかし、それからの県立大間高等学校全日制への前進は、予想以上に難しかった。独立校舎の設備の充実は年ごとに進められ、父母と教師の会の活動、生徒たちの学習・スポーツ両面における活動は高く評価されたが、県立田名部高等学校大間分校の位置は、そのまま昭和五十年三月まで続くのである。

このような状況の中で、全日制県立大間高等学校としての独立は地域住民の悲願となり、さらに多岐にわたる活動が続くうち、昭和四十七年に至って、ついに大間町自民党支部大会が大間町への全日制高等学校誘致を決議し、自民党県連合会へ要望書を提出する。同連合会はそれを受けて県知事に要望書を提出し、翌年三月、県議会に請願書の提出、県議会文教公安委員会付託と、ようやく具体的な進展が見られるようになった。

そこで地元では、北通り三か町村の請願書提出者と大間町関係者、ただちに高校設置促進協議会準備委員会を発足させ、その名称を「下北郡北通地域県立高等学校設置促進協議会」とし、さらに活動を強化する。県教育委員会から定時制大間分校の現状調査を迎えて、同協議会は三か町村大会を開くなど、意気は大いに揚がり、同年

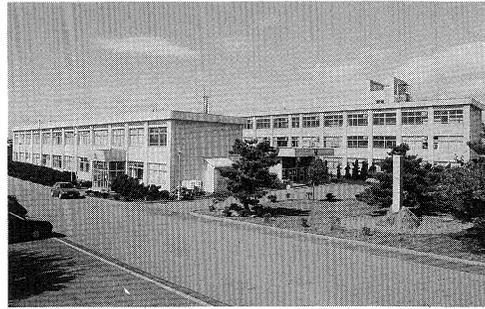


写真 8-1 県立大間高等学校

七月、県議会議務局から請願書採択の通告があったときは、悲願達成の喜びに北通り三か町村の住民は、沸きに沸いたという。

しかし、同年十二月に伝えられた内報は、県立田名部高等学校全日制課程大間分校としての開校である。定時制から全日制への発展は見たが、独立した県立高等学校としての昇格は、まだしばらくの時間が必要だった。

**県立大間高** 昭和四十九年（一九七四）四月一日、県立田名部高等学校大間  
**等学校開校** 分校に全日制課程の普通科が開設される。生徒定員九〇名、二  
学級という小規模なスタートだったが、教諭五名、事務職員一名、用務員一名  
が配属されることになり、四月八日には定員を超えた九四人の入学者を迎えて、  
全日制としては初の入学式と開校祝賀会が盛大に行われたのである。

た。同年五月十一日にはPTA設立総会が開かれ、初代会長に蛭子隆氏を選出するとともに、念願の独立昇格へ向けて力強く歩み始める。

全日制課程の高等学校として、また独立昇格のためにも、新しい校舎を造ろうという運動が展開され、周辺施設の充実計画も急ピッチで進められた。「遠く北海道の連山を、眼下に津軽海峡を一望する大間平に、白亜の学び舎を」を合言葉に、同年十月十四日、校舎建設の地鎮祭が行われ、十二月二十七日にはまず県立学校職員住宅（A棟）を竣工、翌五十年三月二十日、B棟・C棟・体育館の新校舎第一期工事が完成する。一週後に、この新校舎への移転を果たすと、もう後は、県立大間高等学校の独立昇格を待つだけであった。

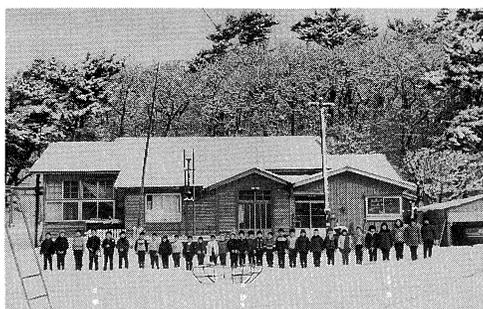


写真 8-2 奥戸小学校材木分校

こうしてついに昭和五十年四月一日、待ちに待った青森県立大間高等学校は、全日制と定時制の両課程を併置する独立校として生まれ変わる。わずか一年の間に、県立田名部高等学校大間分校は施設・人員とも独立した県立高等学校にふさわしい堂々たる内容に変貌していた。

○生徒定員Ⅱ第一学年一三五名(三学級)、第二学年九〇名(二学級)、計二二五名

○職員定員Ⅱ校長一名、教頭一名、教諭一一名、養護教諭一名、事務職員三名、用務員二名、計一九名

校舎の建設は、第一期工事が完成したばかりで、校門や生徒通用門までの全容が完成するまでにはまだ半年もかかったが、この年、北通り三か町村は、県立大間高等学校独立昇格の記念行事で沸き返る日々が続いた。

**奥戸小学校材木分校の閉校** 県立大間高等学校の独立昇格開校をはじめ、新しい六三制に  
よって生まれた大間中学校・奥戸中学校など、新設・創立・

開校の動きが顕著な中で、大間町の教育の歴史にも閉校という現実が一つあった。奥戸小学校材木分校である。

奥戸小学校材木分校が明治三十九年(一九〇六)に創立され、大間町の前身、大奥村全体に学校教育の場が確立されたことは既に述べたが、以来、大正・昭和の激動の時代の中で、同分校は大間町材木地区の教育の拠点として、重要な足跡を残し続けてきた。塾形式の材木特別学級と呼ばれた時代から大奥村立奥戸尋常高等小学校材木分教室として開校し、大正四年(一九一五)に同材木分教場と改称、昭和十六年(一九三一)に奥戸国民学校材木分教場、昭和二十二年に奥戸小学校材木分校と次々に変わった呼び名だけでも、時代の変遷をしの

ぶことができるであろう。

しかし、この材木分校に学ぶ児童数が小人数であるため、開校以来、高学年と低学年とを分ける二部複式学習方式が続けられ、学校教育としては決して十分といえる体制ではなかった。青森県教育委員会では、昭和三十年代に入ると、分校、小規模校の併合・統合の方針を強く打ち出してきたし、大間町教育委員会ではそれ以前から材木分校の併合を懸案事項として検討してきた。

材木地区の児童にも、奥戸小学校と同じ学年別単式学習方式の教育の場を設定し、学習機能を高め、全般の教育効果の浸透を図り、教育の現代化を推進しようとする動きは、昭和四十年代に入って活発化する。そして昭和四十二年五月に材木分校PTA総会で、教育長から学校統合の趣旨説明があった後、各種の問題点を協議するPTA役員、各種団体役員との懇談会が相次ぎ、昭和四十三年三月に材木分校併合委員会が設置され、同年四月、材木地区臨時総会で諸条件整備の上、併合することが決定されたのである。

以後、さまざまな調整が行われ、分校併合延期問題などもあったが、ついに昭和四十四年十二月、大間町議会で分校併合が議決される。そして翌四十五年三月二十五日、六三年にわたって材木地区の教育の拠点だった材木分校は閉校の日を迎えた。閉校式には町長をはじめ、関係者七二名と分校最後の卒業生を含む在校生七〇名が参加して別れを惜しんだが、それは大間町の学校教育発展の新しいスタートでもあった。

材木分校の閉校によって在校生はすべて奥戸小学校へ通学するようになり、分校の施設は以後、材木公民館として生まれ変わり、実質的な社会教育、公民館活動センターの役割を持って材木地区の生活文化向上の場としてきたが、現在は農村婦人の家として新築された。



写真 8-3 大間幼稚園

大間幼稚園の 大間町立大間幼稚園が開園したのは、昭和五十五年（一九八〇）四月のことであった。その前開園とあゆみ 年の九月に施行された大間町立幼稚園設置条例第一〇号により、定員一六〇名の幼稚園設置が決まり、大間平二〇の一・二・六に幼稚園舎が設置され、四歳児五四名（二学級）、五歳児一〇〇名（三学級）を迎えてスタートしたのがその始まりである。

この幼稚園は、保育所・保育園という幼児保育の機能を持つことはもちろんだが、小学校から始まる義務教育の前段階の幼児教育を目標としており、当初から学校教育の一環として設置され、「①じょうぶな明るい子、②よく考え、やりとおすすめ子、③自分の力でやりとおすすめ子、④きまりを守り、安全に気をつける子」という幼稚園教育目標を掲げて運営されてきた。

教科を通して学ぶという小学校からの教育ではなく、遊びという教育活動を通じて、自然や生活、先生や友達や遊具など、園児を取り巻く環境に触れ、親しむことで、健康な心と身体、豊かな感情、積極的に取り組む意欲や態度、そして正しい生活習慣を身に着けるという重要な役割を持つ教育機関といえる。

第一回の入園式と同時に、大間幼稚園父母の会も結成され、順調に大間幼稚園は発展していく。昭和五十六年からは、下北少年自然の家や大間町内山公園で行われた「親子ふれあい活動」に参加し、昭和五十八年から六十年まで、大間町が「むし歯予防啓発推進地区」に指定された折には、中心的な協力園としての役割も果たしてきた。

また、大間町には大間保育園・奥戸保育所・下手浜保育所があり、大間幼稚

園児以外の三歳児・四歳児・五歳児が収容されているが、それぞれの幼児保育施設との交流・連帯を深めてきた歴史は、大間町の幼児教育、そして学校教育全体に、大きな足跡を残している。

平成二年（一九九〇）には、創立一〇周年記念事業として園歌と園章も制定され、昭和六十一年から結成された大間幼稚園幼年消防クラブの活動も注目を集める、特色を持った幼稚園として成長している。

## 六 学校教育の現況と課題

**創造性豊か** 大間町立の二つの小学校と二つの中学校、そして近隣町村の生徒まで擁する県立大間高等学校の**な人材育成** 歴史は、そのまま大間町の人材育成の歴史でもある。大間町教育委員会が掲げる「心身ともに健康で、創造性豊かな郷土を愛する人間をつくる」という教育目標をベースにして、大間町の学校教育の現況を眺めてみよう。

大間町教育委員会が発行した平成七年度の『大間町の教育』によれば、教育方針として次のように明記されている。

大間町教育委員会は、人間尊重の精神を基調とし、「豊かで、住みよい活力のある地域社会の現実」に向けて、心身ともに健康で、創造力に富み、豊かな心と広い視野をもち、高齢化、国際化、情報化などの時代の変化に主体的に対応できる町民の育成をめざした生涯学習の推進に努める。

このため、学校、家庭、地域の各関係機関・団体との連携を密にし、広く町民の理解と協力を得ながら、うるおいと活気に満ちた学校教育、自立と連帯をめざす社会教育、自ら進んで運動に親しむ町民体育・スポー

つ、個性豊かな文化活動の一層の充実を期し、所要の施策を推進する。

つまり、大間町の教育は、学校教育ばかりでなく、家庭教育・社会教育と不可分のものであり、それを行政が支え、推進することを根本的な指針としていることがわかる。そしてこのような学校・家庭・社会の三本柱のうち、の第一番目に位置する学校教育については、①明るくいきいきとした学校づくり、②生徒指導の充実、③教職員  
の積極的研修の推進などが重点目標に掲げられ、その具体的な事項として、①学校管理運営の適正化に努める、  
②教育の機会均等の推進、③教育環境の醸成、④行政運営の調和が挙げられている。

さらに心身に障害を持つ児童・生徒のために、その障害の種類や程度および能力・特性に応じて、一人ひとりに適切な教育を進める特殊教育指導や幼稚園教育についても、きめ細かな対応がなされていて、その全体が大間町の学校教育の流れを形づくっている。

次に、大間小学校、大間中学校、奥戸小学校、奥戸中学校、そして大間幼稚園、特殊学級の現状と課題について述べることにする。

**大間小学校の** 大間小学校の学校教育目標は、①勉強する子、②思いやりのある子、③じょうぶな子の三項目  
**現況と課題** を掲げ、経営方針として、公教育の本質を踏まえ、地域社会ならびに児童の実態を把握し、かつ人的・物的要素を適切に組織し、全職員との共通理解のもとに教育活動を推進する、としている。この学校経営方針を具体的にすると、次の四項目に要約できるであろう。

① 学校教育目標達成のため、学校として統一のある一環した指導を行い、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童を育成する。

② 教師と児童、児童と児童とが相互に理解し合える人間関係を重視し、さらに指導と研修が表裏一体となっ

表8-1 大間小学校の学級数・児童数の変遷

年 度	学級数	児童数
明治7	1	36
25	1	69
30	2	113
35	3	131
40	5	230
45	6	333
大正2	7	373
5	8	467
10	11	534
15	14	612
昭和5	14	671
10	15	797
15	16	890
17	16	953
20	16	829
25	16	717
30	18	712
35	24	1,057
40	23	899
45	21	722
50	20	693
55	21	748
56	20	761
57	21	757
58	20	723
59	18	676
60	18	656
61	18	632
62	18	587
63	18	555
平成元	17	521
2	18	525
3	16	489
4	15	479
5	14	455
6	13	453
7	13	419



写真8-4 大間小学校

て教育効果を上げ、父母の信頼にこたえる。

③ 地域社会があつて学校がある、という観点に立つて、父母や関係団体との連絡を密にする。

④ 教師は人間である。だから長所もあれば短所もある。お互いの長所を見だし、理解し合いながら、個性を発揮しつつ、常に心に平常さを保てる一体感を基調にした職場の構成に努め、教育活動に当たる。

このような教育目標と学校経営方針のもとに、大間小学校は平成七年（一九九五）現在、一学年二学級、二学年二学級、三学年二学級、四学年二学級、五学年二学級、六学年二学級、特殊学級一学級の計一三学級の学年編成、在校生四一九人で運営されている。

児童の実態を見ると、発言力・発表力が盛んであるという反面、学習用具の

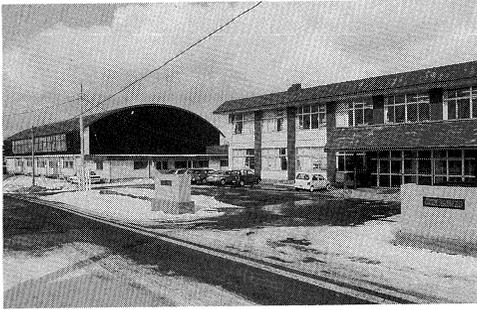


写真 8-5 奥戸小学校

忘れ物が目立つ、集中力に欠ける、根気に欠ける、学習意欲に欠けるなどのマイナス要素もあり、大間小学校としては、学校の課題として次の五項目を掲げている。

- ① 基礎学力を高める。
- ② 自治活動の活発化に努める。
- ③ 体力づくりに努める。
- ④ 基本的な生活様式の確立を図る。
- ⑤ 生活指導の充実に努める。

奥戸小学校の 奥戸小学校の学校教育目標は、①よく考え、発表する子（知  
現況と課題 育）、②仲良く助け合う子（徳育）、③健康でがんばる子（体

育）の三項目を掲げ、経営方針としては、①子どもの持つ無限の可能性を生かす経営、②全職員の自主性・創造性の発揮による協同化の中で営まれる経営、③地域の学校として、父母からも地域からも親しまれ、信頼される経営、を三本柱としている。

さらにこの経営方針を推進するための基礎づくりとして、①生き生きとした学校生活実現のための学年・学級経営の充実、②体力・学習意欲の向上に機能する動的な教育活動、③授業の改善と充実を進めるための校内研修活動の充実、④地域や教育諸団体との連携を深め、地域と一体となった教育の推進、という四項目を打ち出している。

第1節 近代教育へのあゆみ

表8-2 奥戸小学校の学級数・児童数の変遷

年 度	学級数	児童数
明治 8	1	不明
10	1	不明
15	1	不明
20	2	不明
25	2	不明
30	2	不明
35	3	不明
40	3	不明
45	4	不明
大正 2	4	不明
5	5	245
10	7	不明
15	9	295
昭和 2	9	312
5	8	346
10	8	298
15	8	308
17	8	299
20	6	318
25	8	395
30	10	375
35	12	467
40	11	359
45	7	275
50	7	241
55	8	239
60	8	218
61	8	222
62	8	201
63	7	184
平成元	7	165
2	7	147
3	7	139
4	7	120
5	7	130
6	7	118
7	7	120

- このような教育目標と学校経営方針のもとに、奥戸小学校は平成七年（一九九五）現在、一学年一学級、二学年一学級、三学年一学級、四学年一学級、五学年一学級、六学年一学級、特殊学級一学級の計七学級の学年編成、在校生一二〇人で運営されている。
- 児童の実態を見ると、学習面では、言いつけられたことは比較的よく努力するが、基礎学力の定着が十分ではなく、聞く・話す能力が不足しているという反省面と、大間小学校と同じように、根気・集中力に欠けるという悩みがある。行動面でも、素直で友達同士の仲がよいという反面、その場に応じた望ましい行動や言葉づかいなど、基本的な行動様式が十分身に着いていない、積極性・自主性に欠ける、自己中心的傾向が強いなどという面も指摘される。
- ① このような児童の実態を踏まえて、奥戸小学校としては、学校課題として次の五項目を挙げている。
- ② 基礎学力の定着を図る。
- 基本的行動様式の確立を図る。



写真 8-6 大間中学校

③ 保健意識の向上を図る。

④ 心身の健康と豊かな人間性の育成を図る。

⑤ 確かめのある指導を進める。

**大間中学校の** 大間中学校の学校教育目標は、①自ら考えて正しく判断できる生徒、②積極的に学習や仕事に**現況と課題** 取り組み生徒、③健康で情操豊かな生徒、④みんなと一緒に行動できる生徒、の四項目を掲げ、

経営方針の基本は、人間性豊かなくましい生徒を育成することを強調している。

この経営方針は、きめ細かく努力目標と施策とに分けられ、それぞれ六項目のポイントが記されているので抜粋してみよう。

努力目標 ①心身を鍛え、生命を尊重する心を育てる。②働くこと、創造することの楽しさを体得させる。③確かな生徒理解に基づいた一貫性ある生徒指導に努める。④教育内容の精選と方法の改善に努める。⑤豊かな人間関係のもと、職責を自覚し、使命感を高める。⑥あらゆる機会を生かして、家庭、地域社会、関係機関との連携を強化する。

施策 ①秩序ある学校運営を確立する。②教育内容の精選と方法の改善・充実。③教職員の研修と充実。④小学校と中学校の連携と協力。⑤学校・家庭・地域との連携。⑥学校施設の整備・改善。

このような教育目標と学校経営方針のもとに、大間中学校は平成七年（一九九五）現在、一学年二学級、二学年二学級、三学年三学級、特殊学級一学級、

第1節 近代教育へのあゆみ

表8-3 生徒数・学級数の推移

区分 年度	生徒数			学級数		
	大間中学校	奥戸中学校	計	大間中学校	奥戸中学校	計
昭和59	358	118	476	11	4	15
60	372	128	500	11	5	16
61	359	120	479	10	5	15
62	365	114	479	10	4	14
63	341	114	455	10	4	14
平成1	324	117	441	10	5	15
2	283	123	406	9	5	14
3	278	103	381	9	4	13
4	260	105	365	9	4	13
5	269	79	348	10	4	14
6	241	84	325	9	4	13
7	234	65	299	8	3	11

計八学級の学年編成、在校生二三四人で運営されている。

生徒の実態をマイナス面だけに限って厳しく見ると、本来、家庭でしつけなければならぬ基本的な生活習慣がよく身に着いていないことが指摘され、学校教育への依存度が非常に強く、学習意欲の低さや、粗野な言動などが問題となる。しかし体育祭や文化祭などの取り組みには、目を見張らせるような活力があり、学校行事への参加が生徒を育てる好材料となっているようである。

このような生徒の実態から、大間中学校は学校課題として、学力向上、生活態度の純化、精神面の陶冶はもちろんのこと、進学率の向上や父母の意識の啓蒙にも力を入れている。

**奥戸中学校の** 奥戸中学校の学校教育目標  
**現況と課題** は、広い視野に立って物事を考え、たくましい実践力と豊かな社会性を

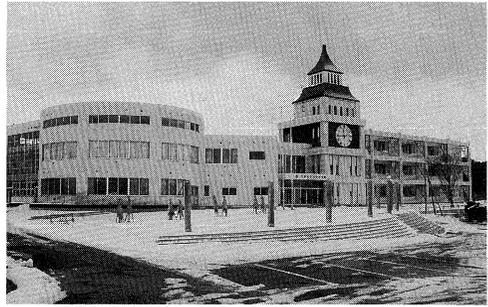


写真 8-7 奥戸中学校

身に着け、自分を磨き、周りを向上させるために、①本気になって学習に取り組む生徒、②規律を重んじ、みんなと協力する生徒、③心豊かで健康な生活を営む生徒、の三項目を掲げている。

この学校教育目標をベースにして、毎年、経営方針の改善を図っているが、地域・生徒の実態を踏まえ、地域に根ざし、感動する心と夢を持ち、論理を構成し、未来を創造する生徒の育成をめざすため、学校課題の解決策を共通理解し、教育目標・努力目標の具体化を推し進め、全人教育の実現を図るという根本方針に変わりが無い。そのために、①自己教育力の育成に努め、基礎的・基本的な学力の充実を図り、独り学びを身に着けさせる、②経営に年次的な見通しを持ち、堅実な歩みを進め、積み上げと確かめのあるものにする、③「地域の教育力」を生かし、父母の信託にこたえる、という三項目が重要視され、年

ごとに具体的発展を見せている。

このような学校教育目標と経営方針のもとで、奥戸中学校は平成七年（一九九五）現在、一学年一学級、二学年一学級、三学年一学級、計三学級の学年編成、在校生六五人で運営されている。

生徒の実態を批判的な面から見ると、学習面では、保育所以来の同じ顔触れであるために、望ましい集団の磨き合いが少なく、思考力・発表力が劣っているという評価が出てくる。行動面では、素直で純朴だが、無気力な面があり、与えられたことはするが、集団生活を充実・向上させようとする自覚に欠けるといふ点が指摘されている。

このような生徒の実態から、学校課題としては次の四項目が挙げられる。

- ① 何事にも真剣に取り組み、基礎学力を修得して、積極的な意欲づくりをする。
- ② 基本的生活習慣を身に着け、生活規律を守る中で、思いやり、協力、感動の心づくり。
- ③ 心身の健康や体力について自己管理できる力づくり。
- ④ 地域社会や家庭との連携を保つパイプづくり。

**大間幼稚園の** 大間幼稚園の教育目標は、①元氣な子（明るい、丈夫な、たくましい）、②やさしい子（仲良  
**現況と課題** く、思いやりのある、感性豊かな）、③やり通す子（やる気のある、最後までやり通す、自分

で考える）の三項目を掲げ、経営方針としては、地域の実態、園児の実情と特性を生かし、父母の期待を踏まえ、適切な環境のもとで教師と園児が温かく触れ合い、充実した教育活動を進めるために園児も教職員も生き生きと接することを基本に、次の一〇のポイントを挙げている。

- ① 園児の「心情」「意欲」「態度」「能力」の伸長を図る。
- ② 環境の整備・充実を進め、発達に必要な用具・遊具の充実を図る。
- ③ 基本的生活習慣や道徳的心情を身に着けさせるために、家庭との連携を密にし、園内活動や家庭生活を通して身に着けさせる工夫をする。
- ④ 幼稚園の姿、園児の成長の姿を参観する集会活動を創意工夫して行う。
- ⑤ 生命尊重の立場からも重要な保健安全教育を推進する。
- ⑥ 一人ひとりの園児について綿密に記録し、個々に適した保育に努める。
- ⑦ 自然や文化、地域の生活に触れる機会をつくり、感動する心を養う指導を進める。

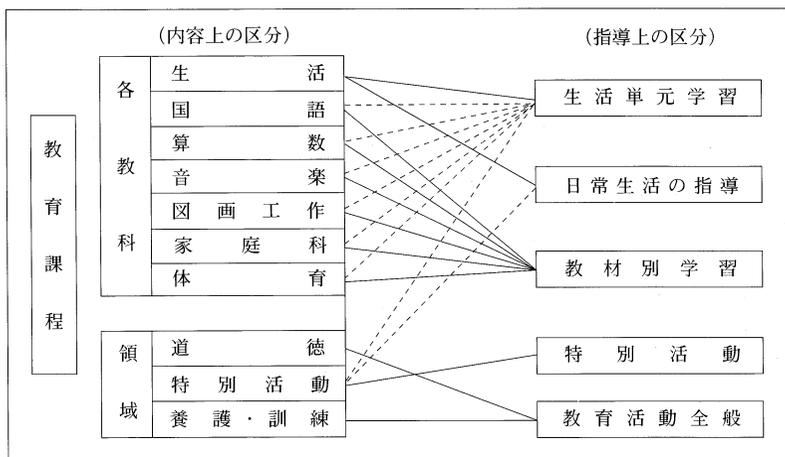
表8-4 園児数・学級数の推移

年 度	園 児 数			学 級 数		
	4 歳 児	5 歳 児	計	4 歳	5 歳	計
昭和59	61	78	139	2	3	5
60	49	67	116	2	3	5
61	52	61	113	2	2	4
62	52	64	116	2	2	4
63	49	63	112	2	2	4
平成1	55	57	112	2	2	4
2	47	59	106	2	2	4
3	34	50	84	2	2	4
4	39	38	77	2	2	4
5	28	39	67	1	2	3
6	35	31	66	2	1	3
7	37	39	76	2	2	4
8	38	37	75	1	2	3

平成8年5月1日現在(「学校基本調査」による毎年5月1日現在の資料)

- ⑧ 他保育施設や地域団体との交流を深め、園内活動では得られない体験活動を進める。
- ⑨ 教師は常に研修に励み、園児の遊びを發展させる保育に努力する。
- ⑩ 遊具などによる事故に心を配り、常に安全点検や使い方を研究する。
- このような教育目標と経営方針のもとに、大間幼稚園は平成七年(一九九五)現在、四歳児二学級、五歳児二学級編成、全園児七六人で運営され、これを地域別で見ると大間地区六三人、奥戸地区一人、材木地区二人が大間町の通園バスで送迎されている。そして園児の一般的な実態として、全体的に活発で明るく素直で人なつこく、天候が悪くても外で仲良く遊ぶことができ、後片付けもきちんとできるが、遊びを發展させたり、自分の

図8-1 特殊教育の領域・教科など



考えや意見を言葉で表現したり、他人の話をよく聞いたりすることは苦手という指摘がされている。

そこで幼稚園の課題として、

① 幼稚園と家庭との連携を深め、一体となって幼児の教育環境を整える。

② 日常の園内教育環境づくりを工夫し、園児活動の活発化を図る。

③ 人的環境の充実、特に教師の研修および地域、父母との交流。

④ 家庭との連携により園児の基本的な生活習慣の定着化を図る。

⑤ 幼稚園と小学校の連携を深める。  
という五項目が挙げられている。

**特殊学級の 心身に障害を持つ児童・生徒に対する特殊教育状況と課題** について、大間町では町内の小中学校に特殊教育を置き、障害の種類や程度および能力・特性に応じて、適正な教育を行っている。そして大間町の特殊教育指導の重点として次の四つのポイントが挙げられる。

① 県の心身障害児就学指導委員会との連絡を密にし、児童・

生徒の障害の実態・能力・適性などの的確な判断と就学の適正・円滑化を図る。

② 児童・生徒のそれぞれの実態を十分に把握して適切な教育課程を編成する。一人ひとりが障害を克服し、生き生きと学習できるよう指導内容・指導法の改善に努める。

③ 児童・生徒に心身障害児に対する正しい認識と人間尊重の精神を培い、関係機関とともに特殊教育の重要性、障害児に対する偏見の除去について、地域全体の啓発に努める。

④ 家庭、福祉施設および医療機関との連携を密にし、指導効果を高め、町内四校では特殊教育の効率を高めるための教育課題の編成に努める。

特殊学級は町内四校とも一学級が設けられていて、年度によって児童・生徒数に変動はあるが、多いときでも四、五名を超えることはなく、平成七年（一九九五）度では、大間小学校四名、奥戸小学校一名、大間中学校二名となっていて、少人数だけに非常に充実した内容の特殊教育が展開されている。

特殊教育というと、通常の教育と区別・差別する教育との印象を与えるが、教育活動は普通学級と対等であることが原則であり、普通学級への参加など、細やかな配慮のもとに運営される。その領域・教科を示すと、図8-11のようになる。

## 七 大間町の各学校の学校自慢

**大間小学校** 大間小学校の学校自慢を数え上げていくと枚挙にいとまがないが、まず第一節で述べたとおり、**の学校自慢** その歴史と伝統であろう。下北郡内のいずれの町村より早く、独立校舎をもって正式に開校した

という事実は、これから先、いかなる時代を迎えようと、永遠に記録として残る歴史の一ページである。平成七年（一九九五）度現在で二三年という伝統を持つ小学校は、下北郡内だけではなく、青森県全体を見ても数少ない。このように大間小学校は、大間町ばかりではなく、下北地方を代表する小学校として明治・大正・昭和、そして平成の時代を通じ、成長・発展し続けてきたのだった。

しかし、大間小学校の学校自慢は、その伝統の古さだけにあるのではない。特に剣道や野球、バスケットボールなどのスポーツにおいてその活躍は群を抜く成績を挙げている。年表から地区大会での成績を抜粋してみよう。昭和四十七年（一九七二）五月、下北郡少年剣道大会優勝（三年連続）をはじめとして、昭和五十四年、五十八年、六十年、六十一年と、むつ下北地区剣道大会団体優勝の記録を残しているし、下北地方だけではなく、昭和六十二年九月の青森県黒石市で行われた県選抜剣道大会、平成元年八月の青森県南部町で行われた北奥羽剣道大会にも出場して、大間少年剣士の名を高める活躍がある。

野球では昭和六十一年八月の少年野球大会青森県大会へ下北代表として出場して以来、昭和六十三年七月の北通地区防犯野球大会に優勝、平成元年七月と平成三年六月にはスポーツ少年団下北地区野球大会にも優勝、県代表の栄冠を勝ち取った。惜しくも優勝を逃したときも、各種野球大会で準優勝を記録している。

またバスケットボールでは女子の活躍が目立ち、平成四年十一月のミニバスケットボール友好杯では、女子の部優勝、翌五年の金沢杯争奪むつ下北地区バスケットボール大会でも女子の部第三位の好成績が目される。また剣道・野球・バスケットボールばかりでなく、平成五年八月の全国小学校陸上競技大会におけるリレー第一位の活躍も特筆されていい記録であろう。

大間小学校の児童数は昭和三十五年度をピークに、年々減少の傾向にあるが、これからも下北最初の小学校と

して、さまざまな記録を塗り変えていくに違いない。

**奥戸小学校** 奥戸小学校の学校自慢も、大間小学校に勝るとも劣らない多彩な内容を持っている。また**学校教の学校自慢** 育が一般に浸透し切らなかつた大正の時代でも、たびたび学齢児童の就学・出席・成績の良好の実績によって郡衙から賞金を受けた奥戸小学校は、その後の各時代を通じて、充実した内容の活動を展開してきた。こども郵便局の実施により、仙台郵便局長からたびたび感謝状が送られたり、優良こども郵便局長賞を受賞したり、児童の人命救助によって県警本部長から感謝状を受けたりしたことなども、奥戸小学校の輝かしい実績といえるであろう。

スポーツ・音楽などの分野においても、奥戸小学校は多くの栄冠を獲得している。剣道では、平成元年（一九八九）九月の青森県スポーツ少年団剣道大会で団体優勝、翌二年三月には茨城県で行われた第三一回全国選抜少年剣道練成水戸大会に出場している。

野球では、昭和五十八年（一九八三）九月の北通地区防犯野球大会に優勝して以来、大間地区では好成績を残すものの、しばらく下北地区全体、県大会での活躍はなかつたが、昭和六十三年七月に県スポーツ少年団交歓軟式野球大会下北地区予選大会で優勝、弘前市で行われた県大会に出場しているほか、平成元年八月と九月の北通地区防犯少年野球大会では、相次いでブロック優勝の栄冠に輝いた。また、この北通地区防犯少年野球大会は平成三年八月にも優勝している。

音楽の分野で奥戸小学校の名を高めたのは、昭和六十三年のNHK合唱コンクール下北大会で優秀校に選ばれたとき以来で、平成二年のNHK学校音楽コンクールでも優秀賞に輝く見事な成績を誇っている。本州最北端の地の小学校の、まさに全国区クラスの学校自慢である。

また変わったところでは、奥戸小学校の児童によって組織される浜の子少年消防クラブが昭和六十三年五月に消防庁長官表彰を受けていることも、忘れてはならない学校自慢の出来事である。

奥戸小学校の児童数も昭和四十五年をピークに年々減少し、昭和六十三年からは二〇〇名の大台を下回るようになったが、少数精鋭の児童たちによる学校自慢は、さらに積み重ねられていくことであろう。

**大間中学校** 大間中学校は開校してから二年後の昭和二十四年（一九四九）四月から学校林植林を実施してき**の学校自慢** た。最初は杉苗二五〇〇本を植林することからスタートしたが、年々成長する緑の木々は見事な学校林として昭和五十九年には一万八六七ヘクタールに達し、今もお成長を続けている。また昭和三十一年からは、学校田で稲作も開始し、生徒による田植え作業は年中行事となっているが、このような植林・田植えなどによる生きた実践教育が行われていることは、それ自体が大きな学校自慢である。

スポーツの分野での活動を見ると、まず下北中体連での各種競技の男女それぞれの好成績がある。年代順に追ってみると、昭和三十五年七月の器械体操女子団体優勝（県六位）と卓球女子団体優勝を皮切りに、下北地方を代表するスポーツ優秀校の実績を残していく。昭和四十三年七月と四十八年六月に柔道男子団体優勝、昭和五十二年九月に排球女子優勝、昭和五十六年六月と翌年六月の二年連続して剣道女子団体優勝、昭和六十年六月と翌年六月のこれまた二年連続して剣道男子団体優勝、そして平成二年（一九九〇）六月には男女とも柔道団体優勝、平成三年六月の柔道女子団体優勝、平成四年六月のソフトボール競技優勝と柔道女子団体優勝と続く。

中体連以外の大会でも、昭和四十二年九月の下北郡市町村対抗陸上競技大会では男子総合優勝に輝いているし、昭和六十一年七月の青森県中体連剣道大会では、男子団体優勝の栄冠を手にした。柔道・剣道といった武道から器械体操、卓球、排球、ソフトボールまで広範囲な活躍が目目される。

もちろんスポーツばかりが学校自慢ではない。昭和三十六年九月には、NHK全国唱歌コンクールでは下北地区第一位となったし、昭和五十八年から六十年まで三年連続して青森県吹奏楽コンクールで金賞という成績を挙げ、音楽の大間中学校の名を県下にとどろかせた。まさに心身ともに豊かな生徒たちがもたらした栄光といえるであろう。

平成五年五月、新校舎落成を記念して大間中学校には桜と松合わせて一八〇本が植樹されたが、冒頭に述べた学校林への植樹や学校田への田植えとともに、緑豊かな教育環境づくりがこのようにバランスのとれた学校自慢を生む原動力となっているのかもしれない。

**奥戸中学校** 心身ともにバランスのとれた情操豊かな教育による学校自慢ということでは、奥戸中学校で象徴的**の学校自慢**に挙げることができるのは、掛け値なしに見事な学校花壇づくりの実績であろう。大間中学校と同じように、学校部分林への植樹など、緑に親しむ教育環境づくりも盛んに行われているが、花いっぱい教育ともいうべき学校花壇づくりでは、青森県内のどの中学校にも負けない情熱が傾けられてきたからである。

その成果は昭和六十一年（一九八六）十一月に青森県花壇コンクール優秀賞を受けることによって、文字どおり花開いた。そしてそれは同時に青森県だけではなく、第二三回全国花いっぱいコンクールの優良賞も受賞するようになったからである。翌年の同コンクールでも下北地区第一位に輝いた奥戸中学校は、以後、花々の満ちあふれる美しい中学校として有名となり、花壇ばかりでなく、菊一鉢栽培など、季節に合わせた花の育成が続いている。

このような美しい環境からは、美しい音楽の才能も芽生える。昭和五十四年八月、青森県吹奏楽コンクールで県一位となって以来、二年連続してその栄冠を守り、昭和五十六年一月には青森県アンサンブルコンテストで優

勝し、東北アンサンブルコンテストに出場、銀賞を受賞するようになる。その後も下北郡アンサンブルコンテスト第一位、青森県アンサンブルコンテスト銀賞が続ぎ、平成二年（一九九〇）八月の青森県吹奏楽コンクールで金賞に輝くなど、音楽の奥戸中学校の名を欲しいままにしている。

スポーツの分野でも昭和五十五年六月、北通中体連球技大会野球の部で優勝したのをはじめ、昭和六十一年七月の第一回町民交通安全駅伝大会に優勝、翌年も連続して制覇したほか、平成三年七月のはまなす駅伝でも男子優勝を果たしている。柔道や剣道も男女ともに強く、平成元年六月の中体連柔道女子団体優勝、平成三年九月の下北郡中体連新人戦剣道男子団体優勝、平成四年五月の青森県青少年剣道三沢大会男子団体優勝など、その活躍ぶりには目覚ましいものがある。

また、スポーツ以外の学校自慢として挙げられるのは、昭和五十四年十一月の青森県交通安全協会からの表彰や、昭和六十三年三月の財団法人日本英語検定協会からの団体優秀賞の受賞なども忘れてはなるまい。

**大間高等学校** 大間高等学校は先にも述べたように、県立の独立した全日制高等学校となつてからは二十数年の**学校自慢**と日も浅いが、定時制県立田名部高校大間分校としての開校から数えると既に半世紀近い歴史を持つ高等学校として、数え切れないほどの学校自慢を持っている。

定時制が開校したのは昭和二十三年（一九四八）六月だが、五年後の昭和二十八年ごろから地区体育大会で男女とも籠球や卓球に頭角を現し始め、相次ぐ優勝や準優勝の実績は県定通総体の好成績にも結び付いていく。昭和四十年代に入ると籠球や卓球以外に羽球・野球・ソフトボールも加わり、地区体育大会では優勝を総なめするようになり、県定通総体でも上位を独占するようになる。この傾向は昭和五十年代に入っても衰えず、平成に入っても各球技の強豪として知られている。



写真 8-8 大間高等学校ラグビー部の活躍

スポーツばかりでなく、生活体験発表での好成绩も注目され、県大会へ出場して活躍しているほか、生徒二名に日本野鳥の会青森支部から感謝状が贈られるなど、多彩な分野での定時制生徒の活動も見逃してはならない。

独立昇格して二〇年を迎えた全日制の大間高等学校は、歴史こそ浅いがここでも学校自慢は定時制に劣らず、華やかな彩りを見せている。中でもスポーツの分野におけるラグビー部の活躍は、特に群を抜いて輝いているといっている。

昭和五十三年十月二十三日、大間高等学校ラグビー部は、全国大会青森県予選で堂々の初優勝を遂げた。創部されてからわずか二年目の快挙である。そして全国大会東北大会の壁は破れなかったものの、この年からの快進撃は大間町ばかりではなく、下北地方、青森県の人々の目を見張らせるものがあった。昭和五十四年八月には国体県予選に優勝、同十月に県ラグビー新人大会で優勝、そして全国大会県予選で二年連続の優勝を果たす。その翌年も国体県予選で二年連続、全国大会県予選で三年連続の優勝の栄冠を勝ち得たのである。

以後も大間高等学校ラグビー部の黄金時代は続く。昭和五十六年六月の高校総体での準優勝、翌年の県高校総体開会式で活動奨励賞の受賞、同年十月には県高校ラグビーベストフイフティーン賞を受賞と、昭和五十年代を通して強豪大間高等学校ラグビー部の名を欲しままにする時期が続くのである。

しかし、大間高等学校の学校自慢はラグビーだけではない。スポーツの分野では軟式野球部や陸上部の活動も忘れてはならないが、作文・音楽・放送などの分野での全県的・全国的な活動も大きな注目を集めてきた。年代

順に挙げていくと、昭和五十七年一月、読書感想文コンクール全国大会で佳作入選を果たし、翌年八月、吹奏楽部が県発表大会でC級の部の金賞を獲得、引き続き同年十二月、第三回県高等学校総合文化祭放送部門で放送部が優秀賞を受賞する。昭和五十九年十二月には読書感想文全国大会で最優秀賞を受賞、翌年八月には青森県吹奏楽コンクールでCクラスの部金賞を獲得、そして平成三年（一九九一）十二月には放送部が制作した「ジュンちゃん」の禁煙日記」と題するテレビ番組が東京ビデオフェスティバルで奨励賞を受賞、平成五年十一月には県社会福祉協議会主催の作文コンテストで「ボランティア精神」が高校の部最優秀賞第一席の栄冠を勝ち取るなど、目白押しに学校自慢が積み重ねられている。

## 八 歴代校長・園長

### 大間町立大間小学校歴代校長

- |    |                |    |                 |
|----|----------------|----|-----------------|
| 初代 | 田中 元長（明治七〇〜九）  | 三代 | 中村 恒男（明治四〇〜四二）  |
| 二代 | 今村 李治（明治九〇〜一五） | 四代 | 今 鼎吉（明治四二〜四四）   |
| 三代 | 田中己代馬（明治一五〜一八） | 五代 | 加藤直四郎（明治四四〜大正四） |
| 四代 | 宮浦岩五郎（明治二〇〜二九） | 六代 | 三浦 清一（大正四〜六）    |
|    | 以上主座教員         | 七代 | 佐々木由路（大正六〜一二）   |
| 初代 | 山内 平八（明治二九〜三四） | 八代 | 工藤 正輔（大正一二〜一四）  |
| 二代 | 田中幸次郎（明治三四〜四〇） | 九代 | 小川万次郎（大正一四〜昭和五） |

- 一〇代 鎌田 東洋 (昭和五〇八)
- 一一代 盛 寿 (昭和八〇一二)
- 一二代 間宮 尚 (昭和一二〇一六)
- 一三代 森 寅吉 (昭和一六〇二〇)
- 一四代 山内 啓介 (昭和二〇〇二二)
- 一五代 佐々木喜代吉 (昭和二二〇二九)
- 一六代 阿部 勇 (昭和二九〇三二)
- 一七代 宮下 義美 (昭和三二〇三八)
- 一八代 川村民五郎 (昭和三八〇四三)

- 一九代 山本 健三 (昭和四三〇四七)
- 二〇代 森 寿悦 (昭和四七〇四九)
- 二一代 川村 善藏 (昭和四九〇五三)
- 二二代 出崎 忠華 (昭和五三〇五六)
- 二三代 楠引 清吉 (昭和五六〇六一)
- 二四代 工藤 強夫 (昭和六一〇平成一)
- 二五代 木村 正彦 (平成一〇四)
- 二六代 山本富美雄 (平成四〇七)
- 二七代 柴田 憲孝 (平成七〇)

大間町立奥旨小学校歴代校長

- 初代 小笠原祐八 (年代不詳)
- 二代 角田岩太郎 (年代不詳)
- 三代 佐藤 貞幹 (年代不詳)
- 四代 千葉 稻城 (年代不詳)
- 五代 吉川 勝美 (年代不詳)
- 六代 佐々木孝一 (大正三〇五)
- 七代 二瓶 昇 (大正五〇六)

- 八代 渡部美喜造 (大正六〇九)
- 九代 三浦 清一 (大正九〇一一)
- 一〇代 鎌田 東洋 (大正一一〇昭和五)
- 一一代 森 寅吉 (昭和五〇一二)
- 一二代 小島 三郎 (昭和一二〇一四)
- 一三代 二本柳嘉一郎 (昭和一四〇一八)
- 一四代 小島 三郎 (昭和一八〇二〇)

- 一五代 佐々木喜代吉(昭和二〇〜二二)
- 一六代 中島 七郎(昭和二三〜二四)
- 一七代 榎引 徳司(昭和二四〜三五)
- 一八代 高橋仁三郎(昭和三五〜三九)
- 一九代 岩泉 正(昭和三九〜四一)
- 二〇代 伊勢 武(昭和四一〜四八)
- 二一代 岩崎 泰光(昭和四八〜五一)
- 二二代 榎引 清吉(昭和五一〜五六)

大間町立大間中学校歴代校長

- 初代 土佐 勇太(昭和二二〜二三)
- 二代 佐々木喜代吉(昭和二三)
- 三代 吉川 美二(昭和二三〜三四)
- 四代 岩泉 正(昭和三四〜三九)
- 五代 川森 則策(昭和三九〜四三)
- 六代 村林 二郎(昭和四三〜四八)
- 七代 小笠原 明(昭和四八〜五三)

- 二三代 松本 衛理(昭和五六)
- 二四代 高杉 常士(昭和五六〜六〇)
- 二五代 鳥山 義雄(昭和六〇〜六三)
- 二六代 安藤 庄二(昭和六三〜平成三)
- 二七代 亀岡 良治(平成三〜六)
- 二八代 石川 貞吉(平成六〜八)
- 二九代 畑中 威義(平成八〜)

- 八代 秋元亀三郎(昭和五三)
- 九代 藤島 晋六(昭和五三〜五七)
- 一〇代 大瀬 昭一(昭和五七〜六二)
- 一一代 平塚 邦夫(昭和六二〜平成一)
- 一二代 木村 芳雄(平成一〜四)
- 一三代 今井 徳夫(平成四〜七)
- 一四代 林 義信(平成七〜)

大間町立奥戸中学校歴代校長

- 初代 中島 七郎 (昭和二二～二八)  
 二代 中島由五郎 (昭和二八～三二)  
 三代 清水 直一 (昭和三一～三八)  
 四代 西村 英二 (昭和三八～四二)  
 五代 久野 定男 (昭和四二～四三)  
 六代 福士 常雄 (昭和四三～四八)
- 七代 熊谷 正之 (昭和四八～五四)  
 八代 松野 良一 (昭和五四～五九)  
 九代 川口 巖 (昭和五九～平成二)  
 一〇代 祐川喜代一 (平成一～四)  
 一一代 佐藤 信直 (平成四～七)  
 一二代 増田 知幸 (平成七～)

青森県立大間高等学校歴代校長

- 初代 山崎 謙三 (昭和五〇～五四)  
 二代 工藤 亮衛 (昭和五四～五七)  
 三代 浅利 定良 (昭和五七～五九)  
 四代 中田健之助 (昭和五九～六二)
- 五代 鎌田 景三 (昭和六二～平成二)  
 六代 目時 義隆 (平成一～三)  
 七代 野坂 忠尚 (平成三～六)  
 八代 高橋芳次郎 (平成六～)

大間町立大間幼稚園歴代園長

- 初代 藤島 晋六 (昭和五五～五六)  
 二代 森 寿悦 (昭和五六)
- 三代 熊谷 正之 (昭和五六～六三)  
 四代 佐々木多喜郎 (昭和六三～)

## 第二節 学校教育の諸団体

### 一 大間町教育研究会

学校の枠を 大間町には計一一に及ぶ学校教育の諸団体があり、それぞれが大間町の学校教育の充実発展のためを超えた活動 ために盛んな活動を展開しているが、この大間町教育研究会は、学校という枠に縛られることなく、幅広い研究活動をめざす団体である。

大間町の大間小学校・奥戸小学校・大間中学校・奥戸中学校の職員を会員とし、大間町の教育に関する学習指導・生活指導と教育課題などに対するあらゆる研究を行うことを目標にして、昭和四十三年（一九六八）に設立し、大間町の教育に大きな足跡を残してきた。そして昭和六十年には、生徒指導部会・学習指導部会・事務主事部会の三部会に組織を改善し、さらに意欲的な活動を継続している。

この組織改善に当たっては委員会が開かれ、次の八項目が検討された。

- ① 大間町の教育課題に沿った研究会にする。
- ② 積み上げと確かめのある研究会にする。
- ③ 教育課題とのかかわり合いで共同研究にする。

- ④ 会員全員が取り組める課題設定をする。
  - ⑤ 部会研究の内容を全体的なものにする。
  - ⑥ 大間町の教育の実態と歩みが転任してきた会員にもわかるようにする。
  - ⑦ 研究成果が子どもに還元され、さらに会員に還元されるものでありたい。
  - ⑧ 限られた期日の中で、研究のため、校内研修とのかかわり合いも考える。
- 以上のような話し合いの中で、大間町の教育課題は何かが煮つめられ、「生徒指導」と「低学力」の二つの問題点に集約して研究活動・部会活動が展開されることになった。研究誌の発行ばかりではなく、会員相互の交流をもっと密にし、連帯感を持って実践指導の研究に乗り出したのである。

そのため同研究会の活動計画は多彩なプログラムで彩られている。年一回の総会と部会組織会、毎月のように開かれる委員会、年四回の各部研究会などのほかに、講演会や音楽祭も時期に合わせて開催され、それぞれの会合で得た研究収録原稿が年一回一冊にまとめられる。各学校内の行事や対外行事に追われてしまいがちな教職員が自分の所属する学校の枠を超えて、大間町の教育全体を見ずして研究活動を行う充実した学校教育団体である。

## 二 大間町生徒指導連絡協議会

**学校と家庭を** 大間町生徒指導連絡協議会は、昭和五十一年（一九七六）に設立された大間町の児童・生徒の**結ぶ援助活動** 学校と家庭を結ぶ援助活動を行う学校教育団体である。その目的の第一番目に「児童生徒の学校生活、家庭生活の精神的安定を図るための援助活動を行う」と明記されているように、その組織活動が精神的

な面までに及んでいるところは、注目に値するであろう。

この会の正式名称は「大間町小中高等学校生徒指導連絡協議会」となっていて、大間町に所在する町立の小学校・中学校ばかりではなく、県立の高等学校までを対象とし、その構成メンバーは大間町の小中高等学校長と児童生徒指導担当教員によって組織される。そして、各学校の生徒指導に関して相互に密接な連絡を取り、地域における生徒指導の諸問題について、教育的見地から効果的な対策を講ずるとともに、指導体制の確立を図り、生徒指導を積極的に推進している。

特に児童・生徒の問題行動を未然に防止する諸活動を行うことに重点が置かれ、健全な社会生活を営む上に必要な資質の基礎を児童生徒が養えるような活動を行う。具体的には、夏季・冬季などの長期休業中の学校の校外巡回指導などが実施されるわけである。

活動計画は、その年度によってそれぞれ新たに打ち出されるが、理事会の開催や『生指連だより』の発行によって情報を密にすることや、マルチ検査の実施、研修会の開催によって、調査および研修にも非常に力が入れられる。さらに生徒指導に当たって、福祉事務所・防犯協会・交通安全協会・警察署などの関係機関との連携を密にすることも、この学校教育団体の任務である。

### 三 北通地区学校警察連絡協議会

一町二村の学校 北通地区学校警察連絡協議会（略称北通学警連）は、昭和四十一年（一九六六）に結成されと警察とを結び、大間町・佐井村・風間浦村の各小学校と中学校、そして県立大間高等学校と大間警察署と

で組織されている学校教育団体の一つである。

この会は、児童福祉法の原理と精神にこたえて、学校と警察が常に緊密な協力体制を保持し、児童・生徒の非行防止とその福祉を図り、健全な育成を期することを目的とし、これまで各種事業を積極的に行ってきた。

#### 四 北通地域生徒指導・非行防止推進協議会

**地域ぐるみの 共同指導活動** 北通地域生徒指導・非行防止推進協議会（略称北通生進協）は、昭和五十七年（一九八二）に設置された地域ぐるみの共同指導活動を行う学校教育団体である。北通地域内の各町村に所在する小学校と中学校、高等学校とその関係機関、団体との連絡を密にし、生徒指導および非行防止活動を効果的に推進することを目的としている。

構成メンバーは、地域内各町村の小・中・高等学校の校長と小学校生徒指導主任、中学校生徒指導専任教諭、高等学校生徒指導主事全員から成り、協議および活動は、次の四項目となっている。

- ① 生徒指導重点実践要項にかかわる各学校での実践状況の情報交換および実践上の問題点に関する研究協議。
- ② 長期休業中における生徒指導対策と共同指導の推進。
- ③ 地域における非行防止対策の推進。
- ④ その他目的達成のために必要な事項。

なお、この北通生進協の設置期間は、昭和五十七年から五年間となっていたが、状況によって延長され、北通学警連とともに、児童・生徒の非行防止のために充実した活動を続けている。

## 五 大間町学校保健会

児童生徒の健康を守る 大間町学校保健会は、昭和三十九年（一九六四）に設置された、文字通り児童・生徒の健康を守る学校教育団体である。昭和三十三年に学校保健法が制定され、全国の各市町村に学校保健会が

組織され始めたことは、児童・生徒の体位向上と学校環境の改善に大きな影響を与えてきた。大間町学校保健会の設置も例外ではなく、その成果には大きなものがあるといわなければならない。

昭和三十年代、大間町の児童・生徒の健康に関しては、全国平均を下回っているばかりではなく、寄生虫卵保有率が六〇%以上を示していたほか、むし歯・耳鼻咽喉疾患・トラコーマ疾患などに関しても、高い罹患率を示していた。これら数多くの問題を、できるだけ効果的に改善・解決するために、大間町学校保健会が設置されると、それまでの罹患率は目に見えて下がり、昭和四十年代の半ばまでに、六〇%もあつた寄生虫卵保有率もその一〇分の一に低下するほどになったのである。

もっとも設立当初から昭和四十年代初めのころは、その寄生虫駆除の活動は大変であつた。大間町の全児童生徒に対し、年三回の駆虫剤の服用を義務づけ、検便もその都度実施したというのだから、その力の入れようが想像できる。寄生虫駆除のほか、当初特に力を入れたのは、歯磨きの励行とインフルエンザ予防接種などであり、歯磨きについては、大間町学校保健会のネーム入り歯ブラシ、練り歯磨きの配布などが積極的に行われたという。昭和四十三年には、良い歯・健康優良児童・生徒の表彰が行われたり、オージメーターの購入により、初めて聴力検査が行われるなど、大間町の児童・生徒は、疾病異常の軽減と予防ばかりではなく、基本的な生活習慣

の形成、体位の向上など、著しい健康への道を歩み始めたのである。

昭和五十年代に入ってからも寄生虫駆除や歯磨きの励行は行われていたが、五十年代も後半になると、その心配はほとんどなくなり、血液検査・貧血検査・耳鼻科検診・眼科検診・せき柱側わん症二次検診などが主な事業として推進されるようになる。そして、学校保健衛生思想の普及、保健安全にかかわる研修会への積極的な参加など、大間町学校保健会の活動はさらに幅広く、充実してきている。

## 六 大間町校長会

**大間町教育の充実を図る** 大間町校長会は、大間町内の大間幼稚園・大間小学校・奥戸小学校・大間中学校・奥戸中学校・県立大間高等学校の五校と一園の校長・園長によって組織されている学校教育団体である。五

校と一園のトップ同士が相集い、地域の当面する教育の諸問題について研究・協議し、相互理解を深め、協力し合って課題解決の方途を探り、学校経営ならびに大間の教育の推進に率先し、その充実を図ることを目的としている。

月一回の定例会が開催され、必要に応じては教育長・教育委員会総務課長・社会教育課長も出席し、伝達依頼事項を協議し合い、連携を深める形が取られているから、まさに大間教育の首脳会議と呼んでもいい存在であろう。そしてこの大間町校長会が行う事業は、次の六項目に集約される。

- ① 研究活動の推進 ㉞下北小中学校長会研究大会開催への運営・準備・協力、④下北特殊教育研究大会の準備・運営への協力、㉞郡連合PTA研修大会の準備・運営への協力、⑤大間町教育研究会の組織替えおよび

研究の推進、④県校長会研究会への積極的参加、⑤大間町校長会研修視察旅行の実施

② 『大間町の教育』の改定版作成

③ むし歯予防啓発推進連絡協議会実践研修会への協力体制の確立とその推進

④ 生徒指導プロジェクトチームへの協力体制の確立

⑤ 月例校長会の開催⑦幼稚園・小学校・中学校・高等学校連携の具体的な実践化、④基礎学力の向上と生徒指導の充実、⑤行事関係の連絡調整

⑥ 共済組合レクリエーションの企画・運営

## 七 大間町教頭会

町内各校の 大間町教頭会は、町内五校一園の教頭・主任で構成される。町内五校一園の行事などの連絡・調整と調整、さらに連携の窓口となっている学校教育団体である。この大間町教頭会が行う事業は、次の二項目に集約される。

- ① 月例教頭会の開催⑦各校間の情報交換、④各校行事の連絡・調整、⑦生徒指導・学習指導の連携
- ② 研修活動の推進⑦郡・県教頭研究大会への出席、④研修視察旅行の実施

## 八 大間町就学指導委員会

心身障害児 大間町就学指導委員会は、大間町教育委員会の依頼に基づき、心身障害児の就学に関して専門的の就学指導 な調査・審議を行い、その結果を教育委員会に対し報告することを業務とする学校教育団体である。従って最終的な教育措置の決定は、この就学指導委員会の意見に基づいて教育委員会が行うもので、教育措置の決定は就学指導委員会の職務権限ではない。

構成メンバーは現在、大間町の小・中学校長四名、特殊学級担任四名、養護教諭四名、民生委員一名、幼稚園主任教諭一名、保育所主任保育二名、大間保育園主任保育一名、保健婦一名、大間病院医師一名の計一五名から成り、その主な業務は次の五項目である。

- ① 心身障害児の適切な就学のために必要となる障害の種類と程度の診断と、これに基づく指導
- ② 指導の結果に基づいてなされた教育措置が妥当なものであったかどうかの追跡と指導
- ③ 特殊教育の理解を図るために、なるべく多くの機会を設けて社会啓発をする。
- ④ 個々の心身障害児の状況を総合的に早期から日常継続的に洗い出していく活動を推進するための教育相談など、相談活動の充実

⑤ 心身障害児の保護者に対して、客観的資料で障害の正しい理解を図り、関係諸機関の紹介などの情報の提供を推進する。

以上のような大間町就学指導委員会の業務は、大間町の特殊学級教育になくならないものになっているが、

心身障害児の問題は幅広く、さまざまな課題が残されている。その問題点として大間町就学指導委員会は、次の五点を挙げている。

- ① 身体障害児の就学の際は、かなり具体的な手順で就学させているが、卒業・就職ということになると、就学指導委員会は学級担任や学校に任せ切りになっているというのが現状である。その意味で卒業指導委員会を組織する必要がある。
- ② 町内に心身障害児の保護者の組織がなされていない。保護者組織を結成し、活動を推進する必要がある。
- ③ 特殊学級担任は、大体二〜三年で交代するが、ときには一〜二年ということもあり、特殊教育に十分に打ち込むことができないし、専門性にも欠けるといのが現状である。もっと教育水準を保持し、高めていく担任の任期が必要がある。
- ④ 就学指導委員のメンバーに、心身障害にかかわる諸検査を実施できる人物を養成する必要がある。
- ⑤ 少人数の特殊学級は、全人的発達と促す意味から望ましいことではないので、教育課程の編成には、十分な配慮と創意工夫が必要である。

## 九 大間町三者協議会（懇話会）

**教育現場と** 大間町三者協議会（懇話会）は、いわゆる「大間町の教育を語る会」と呼ばれる昭和五十年（一  
**町の懇話会** 九七五）に発足した学校教育団体である。構成メンバーは、町長・助役・収入役の三名と大間幼稚園園長・主任二名、大間町校長四名、大間町教頭四名、大間高等学校の校長・教頭・事務長・定時制教頭の四

名、教育長・教育委員の五名、教育委員会事務局の総務課長・社会教育課長・課長補佐・派遣社会教育主事の四名の計二十六名から成っている。町と教育現場と教育委員会の三者のトップが年に数度集い合って、現代教育のあり方や町の社会教育・学校教育・家庭教育について語り合うもので、会合は一年に二回行われる。

### 一〇 小・中学校連携研究会

**大間町教育の小・中学校連携研究会は、**独立した学校教育団体ではなく、最初に挙げた大間町教育研究会の課題を探る 中の一つの活動と考えるべき研究組織である。大間町の児童・生徒の健全育成を考えた場合、当面する課題は、①生徒指導の諸問題の条件整備とその充実、②低学力からの脱却、の二つに大きく集約されるが、この課題を解決するために、大間町の小・中学校の教師がお互いに連携を取りながら研究するために、特に組織されたものである。例えば、昭和六十年（一九八五）度は、奥戸小学校と奥戸中学校が小・中連携の推進地域に指定されていたので、その活動がどのように展開されたかを見てみると、次のようになる。

- ① 研究主題Ⅱ基礎的・基本事項を定着させる学習指導の研究。国語においては、物語文の心情把握を通して読み取る力をつける。算数・数学については、各学年の学習内容を定着させるための個別指導を取り入れる。
- ② 研究主題設定の理由Ⅱ奥戸小・中学校における学校課題の中には、低学力をどう克服するかが挙げられており、その解決をめざした学校経営が行われている。奥戸小・中学校が小・中連携教科指導研究の指定を受けたことにより、課題である「児童・生徒の基礎学力の向上を図る」という目的をより明確にし、小・中学校が共通理解を図り、一貫性のある教育をめざして実践研究を積み上げることは、主題を達成する上で高い

効果を生むはずである。

③ 研究仮説Ⅱ児童・生徒の学力の実態調査、分析、考察を行い、その結果を踏まえて、小・中両校が共通の問題意識を持ち、その上に立って学習課題を明らかにし、教材研究を行い、教材を精選し、指導過程を確かなものにして単位時間の授業を実践すれば、児童・生徒の基礎学力は確実に向上する。

④ 研究目標Ⅱ⑦児童・生徒の国語・算数・数学の学力の実態を診断学力検査によって分析する、①基礎的・基本的事項を明確にし、児童・生徒の発達を踏まえた学習指導・個別指導を工夫し、授業実践を深める。

⑤ 研究内容Ⅱ⑦児童・生徒の学力の実態分析とその明確化を図る、④児童・生徒の主体的活動を配慮した指導法の工夫と授業実践を推進する、⑦学習課題を明確にとらえさせるための手立てを考えていく、②基礎的・基本的事項を定着させるための指導過程を考える。

⑥ 研究の評価方法Ⅱ⑦基礎的・基本的事項が定着したかをペーパーテスト・実力テスト・チェックリスト・観察などによって確かめ、次のステップへ進む、④どのような能力をつけるか、どこまで到達させるかを明確にした授業実践による評価を試みる、②小学校でのパイプの詰まりを明確にし、それを踏まえた中学校での授業実践が行われたかどうか確かめる。

### 一一 小中高生徒指導連絡協議会

高等教育への 大間町小中高学校生徒指導連絡協議会は、大間町の児童・生徒に高等教育を受ける機会を推進しようと、昭和五十一年（一九七六）に発足した学校教育団体である。そしてこの協議会は、

各学校間の連絡を密にするとともに、主として夏休み・冬休みの指導重点事項の検討および情報交換を中心に活動してきた。

昭和五十年代前半には、中学生による喫煙や万引きなどの非行事件が起こったり、水死事故や教師への暴力事件があったため、より小・中学校、高等学校連携の必要性が高まるとともに、各学校は生徒指導体制の見直しと再編に迫られ、中でも中学校と高等学校との連携は緊密になっていったのである。

またその一方、中学生の非行の増加に比例して、学習意欲のない生徒や低学力の生徒が増加し、言動・服装をはじめ、生活全体が不規則で乱れていることも目立つようになってきた。そのため、基本的な正しい生活習慣の確立が急務となったことはいうまでもない。そして学習が遅れがちな高等学校生徒に対応するため、県立大湊高等学校が中心となり、むつ市内中学校との教科連携の活動が始まると、その輪は下北郡下に大きく広がり、大間高等学校でも昭和五十七年から連携教科指導研究協議会が開催されるようになった。

この研究協議会は、昭和五十八年から春と秋の二回開かれるようになり、春は大間高等学校を会場に、北通地区の各中学校の関係者が集まり、①授業参観、②入試情報の提供、③教科連携についての協議、④生徒の近況についての報告などの情報交換、研究協議を行うようになったのである。

本来、社会生活の最低のルールは、家庭でのしつけが重要な部分を占めているが、それがなおざりにされている現状では、学校生活にもさまざまな影響が出ている。学力をつける上で大切なことは、その学び方にあるという認識に立って、それに合う生活習慣を身に付けさせることが大きな課題となってきた。それぞれの家庭の問題はあるにしても、基本的な生活習慣の定着化は教師の問題としてとらえなければならないとし、中学校・高等学校の教師が連携して根強い協力指導体制を確立しようというのが、同協議会の目的である。

## 一一一 P T A の活動

学校と父母と 戦後の学校教育の中で不可欠の存在となったP T A活動は、大間町でも教育の全般にわたって教師との連携 大きな力を発揮してきた。P T Aとは文字通り、児童・生徒の父母と教師とによって組織される教育団体であり、大間町の各学校では「父母と教師の会」との名称で、設立以来、ずっと学校と表裏一体の活動を行ってきた。また各校のP T Aは連合体を組織し、研修などを通して連携を深めている。

大間町で最初にP T Aである父母と教師の会が発足したのは、大間小学校と大間中学校であり、昭和二十二年（一九四七）六月のことである。奥戸小学校と奥戸中学校ではその翌年七月から、大間高等学校は定時制時代の昭和二十七年十月からであり全日制と統合されたのは昭和五十四年四月からであった。また、大間幼稚園でも昭和五十五年四月、開園と同時に父母の会が結成されている。

青 少 年 町内の保育所・幼稚園をはじめ各小・中学校および各校P T Aはそれぞれ幼年・少年赤十字活動を通して、意欲的・主体的に取り組む生徒の育成をめざし青少年赤十字に加盟、その活動を続けている。

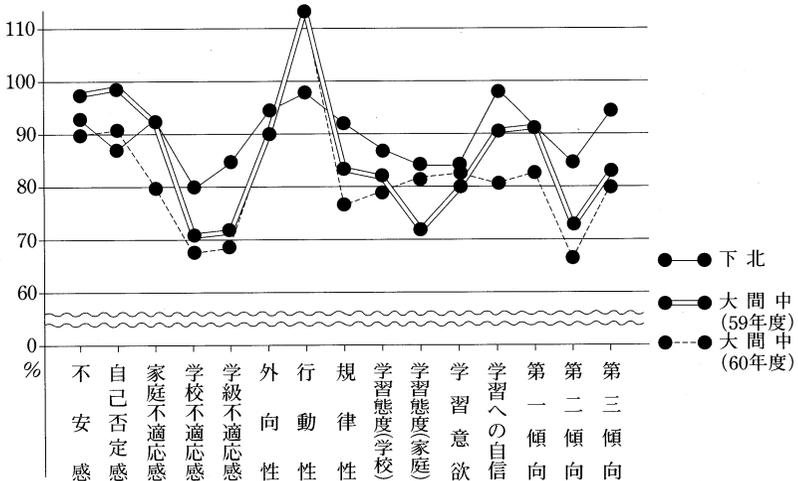
平成四年（一九九二）度大間町は、日本赤十字社青森県支部より青少年赤十字活動研究地域の指定を受け、各加盟団体と地域が一体となった研究実践活動を通し青少年の健全育成に努めてきた。平成七年度には発表が行われ、その活動は継続されている。

### 第三節 児童・生徒の実態

#### 一 マルチ検査から見た実態

大間中学校 大間中学校では、昭和五十八年（一九八三）の調査から 度から生徒たちにマルチ、いわゆる「適応性検査」を実施してきた。学校内外で問題行動が多発し、卒業生の職場への定着も悪かった時期でもあり、生徒の心理的要因を知るために始められたもので、個々の生徒の指導の指針ともなっている。やや古い資料になるが、昭和五十九年度と六十年年度のマルチ検査による大間中学校の生徒の実態と下北地方全体との比較を眺めてみよう。そして、その実態と平成四年（一九九二）度の実態とを重ね合わせてみると、大間中学校の生徒の実態の全体が浮かび上がってくる。

図8-2 大間中学校と下北全体の生徒の実態比較（59・60年度）



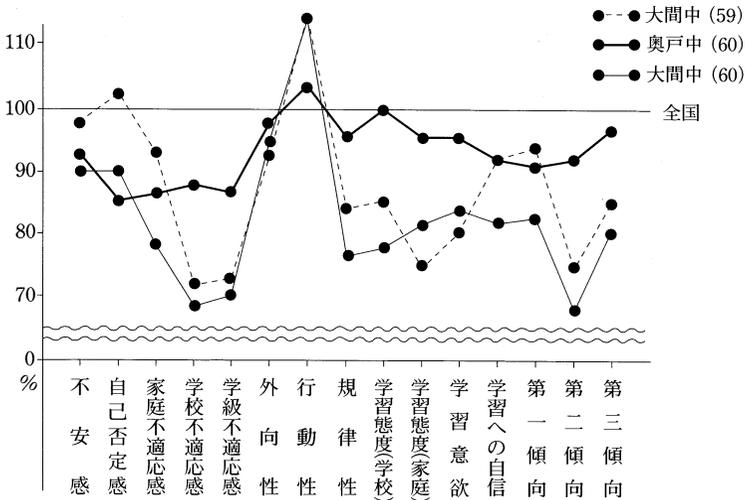
第3節 児童・生徒の実態

まず図8-2の昭和五十九・六十年年度の大間中学校と下北全体の比較を見ると、非行化への恐れのある「第二傾向」がひどく落ち込んでいるのがわかる。

これは、規律性や家庭・学校・学級不適応が強いほど落ち込みが見られ、さらに「行動性」が全国への到達率を大きく上回っていて「規律性」が低いところから、自己本位の行動に走りがちな生徒の実像が浮かんでくる。この傾向は、後に述べる奥戸中学校の検査でも数値の差こそあれ、同様であるところから、大間町全体の生徒の傾向として考えなければならぬ問題であろう。

この図に現れていない「悩み事」の調査では「将来について」が全国平均より一二%も多く、就職や進学など将来への大きな不安を抱えていることがわかるが、「勉強について」は逆に全国平均より少なく、将来に対して不安や悩みがあるものの、勉強はあまりしたくないという「楽天的」な面もある。また「相談について」も「相談するほどでない」が全国比5%増で「相談している」は5%減となっていて、真剣な悩みかどうか判断に迷う結果が出ている。相

図8-3 奥戸中学校と大間中学校の生徒の実態比較 (59・60年度)



談相手も「友人」が圧倒的に多く、「父母」「教師」は極端に少ない。

このような結果を総括して、大間町教育委員会では、生徒たちは本人の甘さもがあるが、学校でも家庭でも生徒を本当の意味で理解し、認め、温かく楽しい学校や家庭をつくるようにしたいとしているが、それは以後、徐々にではあっても、実現の方向に向かっている。

平成四年度（一九九二）の大間中学校の生徒の実態を見ると、①登下校、②朝自習、③教科指導、④給食体制、⑤休憩時間、⑥全校一斉活動、⑦集会活動、⑧その他、のチェックポイントすべてが課題を残しながらも、改善の方向に進んでいるとの結論に達している。

**奥戸中学校** 奥戸中学校でも昭和五十九年（一九八四）度からマルチ検査を実施し、生徒の潜在する能力や問の調査から 題傾向を把握して、生徒指導に役立ててきた。これも大間中学校と同じく、昭和六十年度の検査結果と平成四年（一九九二）度の実態とを重ね合わせて眺めてみよう。

図8-3は奥戸中学校と大間中学校との比較を示しているが、先にも述べたように、数値の差はあってもほぼ同じ曲線を示し、「自己否定感」や「学校・学級・家庭不適応感」が落ち込み、「第一・第二傾向」につながっている。しかし「学習に対する態度」が全国標準値にあり、全般的には学習に打ち込もうとする傾向が見られた。この図には現れていない「悩み事」や「相談について」の結果についても、大間中学校の場合とほぼ同じもので、自分本位のわがままな性格や家庭・学校への甘えや苦しみ事を乗り越えて、たくましい柔軟性のある物の考え方ができるような生徒に成長させなければならない、と総括されている。

そして平成四年度の奥戸中学校の生徒の実態を見ると、「本学区は小学校と同一学区であり、保育園から中学校卒業まで同じ仲間であるという安心感と同時に、転出入生徒がほとんどないため、互いに刺激し合い、向上し

ようとする意欲に欠ける面がみられる」ものの、「生徒はとくに問題傾向もなく、明るく素直であり、清掃作業等も進んで行い、仲間と協力してできるようになってきている」と報告されている。

## 二 保健統計から見た実態

児童・生徒の昭和五十九年（一九八四）度まで体格とむし歯 年ごとに著しい向上を見せてきた大間町の小・中学校の児童・生徒の体格は、ほとんど全国平均並となったが、昭和六十年度に至って頭打ちとなり、わずかながら全国平均を下回る。しかし、身長の割合に対して体重・胸囲の平均値が高く、座高の平均値は低いので、バランスのとれた体格といえ、平成七年（一九九五）度の結果を見れば、その傾向は表8-5に示した通り、以後も続いている。むし歯についての調査は表8-6の通りである。

表8-5 平成7年度身体測定結果

(小学校男子)

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
身長 cm	6年度全国平均	116.8	122.7	128.1	133.5	138.9	144.9
	6年度県平均	118.1	123.5	129.0	134.8	140.2	146.0
	7年度町平均	116.7	121.8	127.7	133.3	139.3	143.8
	大間小学校	116.9	121.5	127.4	133.5	140.0	144.6
	奥戸小学校	116.1	122.4	129.0	132.8	135.6	139.6
体重 kg	6年度全国平均	21.6	24.3	27.3	30.7	34.2	38.4
	6年度県平均	23.0	25.6	28.4	32.6	36.4	40.6
	7年度町平均	22.4	24.4	30.2	33.5	37.3	38.7
	大間小学校	22.6	24.4	29.6	33.6	38.3	39.7
	奥戸小学校	21.5	24.2	32.4	33.2	31.9	34.1
座高 cm	6年度全国平均	65.2	67.9	70.4	72.8	75.1	77.6
	6年度県平均	65.7	68.2	70.9	73.2	75.5	78.2
	7年度町平均	64.0	67.4	70.1	72.6	75.7	77.7
	大間小学校	63.9	67.3	70.0	72.7	76.1	78.1
	奥戸小学校	64.3	68.0	70.3	72.5	73.3	75.6

(小学校女子)

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
身長	6年度全国平均	116.1	121.8	127.6	133.4	140.1	146.7
	6年度県平均	116.7	123.3	128.9	134.9	142.0	148.7
	7年度町平均	115.1	119.4	128.2	131.7	140.6	147.3
cm	大間小学校	115.5	119.3	128.2	131.0	140.5	147.7
	奥戸小学校	114.4	119.8	128.0	133.5	140.9	146.2
体重	6年度全国平均	21.2	23.7	26.8	30.3	34.6	39.4
	6年度県平均	21.7	25.0	28.3	32.2	36.8	41.3
	7年度町平均	22.1	24.0	29.3	30.7	37.6	43.0
kg	大間小学校	22.8	23.8	29.4	30.5	37.5	43.8
	奥戸小学校	20.9	24.6	28.8	31.2	38.4	40.8
座高	6年度全国平均	64.8	67.5	70.1	72.8	76.0	79.3
	6年度県平均	65.0	68.1	70.8	73.5	76.8	80.1
	7年度町平均	63.5	66.1	70.8	71.7	76.4	79.7
cm	大間小学校	63.4	66.1	70.8	71.5	76.3	80.2
	奥戸小学校	63.8	66.6	70.6	72.1	76.7	78.5

(中学校)

		男子			女子		
		1年	2年	3年	1年	2年	3年
身長	6年度全国平均	152.0	159.3	165.1	151.8	155.0	156.6
	6年度県平均	153.9	161.2	166.1	152.5	155.6	157.4
	7年度町平均	150.4	161.0	163.8	150.8	155.0	155.8
cm	大間中学校	150.0	160.8	164.0	150.3	155.4	155.7
	奥戸中学校	151.7	161.6	162.7	153.2	154.1	156.2
体重	6年度全国平均	44.0	49.3	54.6	44.4	47.8	50.5
	6年度県平均	46.8	52.2	57.4	46.0	49.6	53.0
	7年度町平均	46.6	53.2	58.3	46.6	48.7	51.3
kg	大間中学校	45.3	53.3	57.2	46.1	48.5	51.7
	奥戸中学校	51.1	52.9	63.9	48.9	49.3	49.1
座高	6年度全国平均	81.0	84.5	87.6	82.1	83.7	84.7
	6年度県平均	82.1	85.5	88.2	82.6	84.1	85.0
	7年度町平均	79.7	85.3	86.3	81.3	82.9	84.3
cm	大間中学校	79.6	85.4	86.2	80.8	82.9	84.5
	奥戸中学校	80.1	85.1	86.7	83.3	83.1	83.6

第3節 児童・生徒の実態

表8-6 平成7年度歯科検診の結果

検査人数

(人)

	大間小	奥戸小	小合計	大間中	奥戸中	中合計	大間高	町合計
男子	193	51	244	109	34	143	102	489
女子	214	65	279	116	31	147	143	569
合計	407	116	523	225	65	290	245	1058

1. う歯のない者

(人)

	大間小	奥戸小	小合計	大間中	奥戸中	中合計	大間高	町全体
男子	3	1	4	5	0	5	2	11
(%)	1.6	2.0	1.6	4.6	0	3.4	2.0	2.2
女子	1	3	4	1	0	1	1	6
(%)	0.5	4.6	1.4	1.4	0	0.7	0.7	1.1
合計	4	4	8	6	0	6	3	17
(%)	1.0	3.4	1.5	2.7	0	2.1	1.2	1.6

(注)う歯=未処置歯+処置歯

2. 処置完了者数

(人)

	大間小	奥戸小	小合計	大間中	奥戸中	中合計	大間高	町合計
男子	18	9	27	4	2	6	11	44
(%)	9.3	17.6	11.1	3.7	5.9	4.2	10.8	9.0
女子	17	12	29	10	5	15	16	60
(%)	7.9	18.5	10.4	8.6	16.1	10.2	11.2	10.5
合計	35	21	56	14	7	21	27	104
(%)	8.6	10.9	10.7	6.2	10.8	7.2	11.0	9.8

### 三 進路状況から見た実態

**高校進学率** 高校の義務教育化の時代と呼ばれる昨今、全国的に高等学校への進学率は高くなり、就職率は低  
**上昇の推移** くなったが、これは大間町においても例外ではない。年度別進学率と就職率を見ると、昭和四

十八年（一九七三）度から大間町の中学生の高校進学率は、うなぎのぼりに高いカーブを描いている。これは昭和四十九年四月から全日制の田名部高等学校大間分校が開校したことによる進学率の向上といえるが、さらに翌年は一挙に進学率は七〇・五%にはね上がった。

しかし、昭和五十年代に入ってから、この進学率は七〇%台を低迷し、昭和五十九年度の青森県平均進学率九三・五%に対して大間町の五九年度までの平均七〇・六%は県下の最下位という数字であった。昭和五十五年度から五十九年度までの下北地方の他町村の平均進学率を見ても、脇野沢村が九五%、大畑町が九二%、佐井村が九〇%、川内町が八八%、風間浦村が八二%、東通村が七七%である。上昇したと思えた大間町の進学率も、他の市町村に比べると、いかに低かったかがわかる。

高校進学率が昭和五十年代の低迷から再び上昇したのは、昭和六十年代に入ってからで、下北地方の他町村と劣らなくなり、進学する高校も地元の大間高等学校ばかりでなく、むつ工業高校、田名部高校、青森市内の高校、函館市内の高校など、多様な学校が進路として選ばれるようになった。

さらにここで注目されるのは、進学を望む保護者が急激に増加したことである。平成四年（一九九二）度に大間町学力向上推進委員会がまとめた意識調査によれば、高校や大学に行かせたいかという設問に対し、高校へは

図8-5 大間高校卒業生の動向  
(平成7年3月卒業)

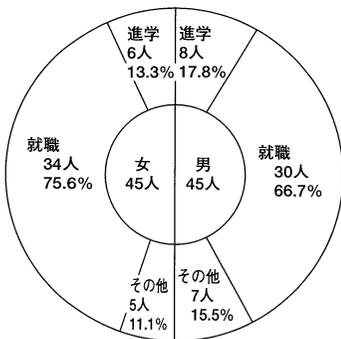
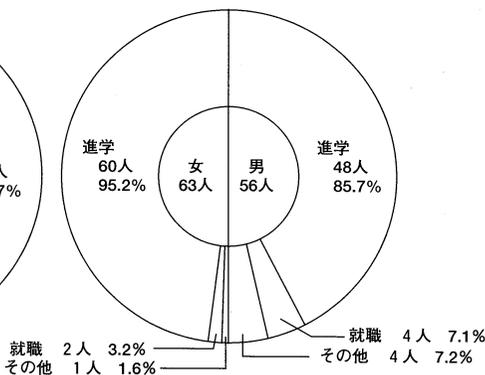


図8-4 中学校卒業生の動向  
(平成7年3月卒業)



男の子の場合一〇〇%、女の子の場合九七%が「行かせたい」と回答している。大学へも男の子の七三%、女の子の四六%が「行かせたい」としているから、保護者の進学への意識は、高校までの学力は男女とも必要と認めているようである。

行かせたい高校は、地元の大間高等学校が五一%であり、他の高校が約半数想定されているところから、子どもにかける保護者の夢が大きいことが想像できる。

**就職希望率の年度別の就職率の推移を見ると、昭和四十年（一九四五）代前半は五〇%台が続き、大間高校の発足以後は四〇〜三〇%台へと低下してくる。五十年代前半は三〇%台の就職率となり、後半は年度によって変動はあるものの、やはり三〇%台を保ち、五十九年度には四〇%と増加する。昭和五十年台後半の五年間の下北地方全体の平均就職率が大間町を入れて一四〜一八%だから、いかに大間町の就職率が高かったかがわかる。ちなみに青森県の中学生の平均就職率は、五十三年度から五十九年度までの年平均が六〜五%であった。**

昭和三十年代から四十年代にかけて、中学卒業者は産業界で「金の卵」ともてはやされたが、昭和五十年代に入ると大きな変革期を迎え

る。科学技術の進歩に伴って、より高度な専門的知識が要望され、中卒若年労働力の需要は年々その厳しさを増す状況も生まれてきた。自動車修理見習工、見習大工や機械工、船員などといった中卒男子の職域も、高等学校卒業業者や短期大学の出身者に取って代わられるようになると同時に、多くの職場が機械化し、ロボットが実用化される時代となってきたのである。事務面でさえO A化が急速に進み、昭和六十年代に入ると労働力の量と質が大きく変化してしまったといえる。

こうした状況が就職率の低下、進学率の上昇という結果に結び付くわけだが、これは大間町だけではなく、全国的な傾向である。しかし、平成四年（一九九二）に大間町学力向上推進委員会がまとめた意識調査によれば、就職希望者は進学希望者に比べて少ないとはいえないものの、学年が進むにつれて就職を希望する生徒は増加しているという結果が出ている。その反面、保護者の方は子どもの就職を望まなくなり、父母と子ども両者の意識のズレがうかがえる。

職種を見ると、女生徒はほとんど紡績関係を希望しているが、男生徒の場合、全国的に中卒者の求人を見送る事業所が増えていることもあり、家業を継ぐ「漁業」以外では、ほぼ建築関係に絞られる。また、就職する場所は、生徒のほとんどが県外就職を希望しており、これは昭和五十年代までの就職状況と変わっていない。

## 第四節 社会教育の諸活動

### 一 社会教育の現状

生涯学習の 大間町の社会教育は、大間町社会教育計画に沿って推進されているが、その計画は、住民の生涯目標の下に にわたる教育活動を進める中で、明るく住みよい町づくりと町全体の教育水準の向上をめざした実践活動が中心となっている。つまり大間町社会教育計画は、大間町教育委員会が掲げる「心身ともに健康で、創造性豊かな郷土を愛する人間をつくる」という大目標のもとに推進されているのである。

大間町社会教育関係団体は、子ども会・青年団・婦人会・老人クラブ・保育所などまで含めて三〇を超すが、こうした各地域の老若男女全体が参加する大きな輪の中で、大間町社会教育計画は次の二つの方針をもって推進されている。

- ① 変動する社会に対応しつつ、地域住民の生活課題や学習要求を把握し、町民の教育に対する意識の開発・改善を推進する。
- ② 社会教育関係団体の活動の現状分析に立ち、連絡・提携を密にするとともに、それに必要な条件を整備しつつ、豊かな郷土づくりを推進する。

以上のような目標と方針のもとに、大間町の社会教育は、大間町教育委員・社会教育委員・町立公民館長・町民体育館長・公民館運営審議委員・体育館運営審議委員・体育指導委員・文化財審議委員など、各分野の担当部門ごとに推進されるが、その努力事項として、次の一〇項目が掲げられている。

- ① 幼児教育および少年教育の充実
- ② 青年団体活動の育成および振興
- ③ 婦人・家庭教育の振興
- ④ 高齢者教室の充実
- ⑤ P T A 活動の充実
- ⑥ 成人教育の推進
- ⑦ 文化財・民俗文化財の収集および保存活動の振興
- ⑧ 図書館活動の充実
- ⑨ 社会体育の振興と体力づくり運動の推進
- ⑩ 新生活運動の推進

① 幼少年から 大間町社会教育計画の目標・方針・努力事項に沿って、青少年から高齢者まで、住民すべてを網羅する教育計画は、幼少年教育・青年教育・婦人家庭教育・高齢者教育・P T A 教育の五つに分けられるが、その個々の内容を見ると次のようになる。

幼・少年教育 Ⅱ 学校および家庭において行われる教育との連携を保ちながら、少年が学校および家庭教育において期待しにくい経験を地域社会で計画実施されることにより、豊かな人間形成を図ることを助長する。年齢の

異なる集団での役割分担や協同意識に立つ体験を持たせるため、少年団体の自主的活動の促進を図る。少年団体および育成団体の活動を援助し、リーダーおよび有志指導者の資質向上の研修機会を図る。单位子ども会それぞれの自主的活動を促進する。

青年教育Ⅱ青年の自発的な学習意欲に基づき、郷土を担う社会的役割と責任を自覚し、規律・協同・友愛の精神を涵養することを助長するために、団体・サークル活動の育成・促進に努めるとともに、各種研修会への派遣と各青年団体の相互理解・調和を図るために、連絡組織の充実を図る。青年団体の自主的活動を図り、連帯感を深めるとともに、郷土の担い手としての役割を自覚させ、学習・奉仕・レクリエーション活動も奨励し、健康でたくましい青年の育成を図る。青年団体・サークルなどのリーダー養成と資質の向上に努め、各種団体との連携を強めるとともに、組織化を促進する。

婦人・家庭教育Ⅱ婦人の地位向上に伴って、自発的な学習・運営・活動をさらに促進するとともに、もっと積極的な社会参加を呼びかけ、より豊かな人生と家庭を築くために、活動の活発化、リーダーの発掘・養成に努める。教養を高め、情操を深めるとともに、主婦として、母親として新生活設計のためにも学習の充実と生活の向上を図る。地域における社会連帯意識の高揚と各種リーダーの資質向上のため、各種研修会への積極的な参加を推進する。

高齢者教育Ⅱ高齢者として現代社会に対する理解と能力を高め、さらに高齢者間の親睦を深めて、高齢者としての活動を促し、健康でだから愛されるための学習を助長する。

P T A教育Ⅱ社会教育関係団体としての意識の高揚を図り、学校・家庭・地域が連携を保ち、それぞれの役割を分担しながらも、相互理解のもとに一体となった活動化を図る。

文化活動と 年代別の教育に合わせて、それぞれ文化的活動と体力づくりをめざす活動が必要になってくる。  
体力づくり 芸術・文化・文化財関係、図書館、公民館、社会体育、体育館、そして新生活運動まで、個々の分野の活動方針は次の通りである。

芸術・文化・文化財関係Ⅱ芸術・文化団体の活動を援助し、芸術・文化の振興に努めるとともに、文化財の保護・収集、ならびに調査活動を推進する。

図書館活動Ⅱ町民の文化的関心を高めるために、図書購入や巡回文庫の効率的利用を図るとともに、各種サークルを通して広報活動の充実を図り、意識・関心の高揚を図るための活動計画を推進する。

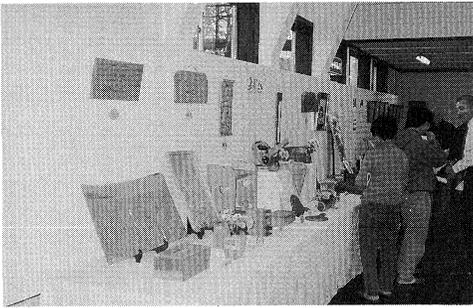


写真 8-9 町民文化祭

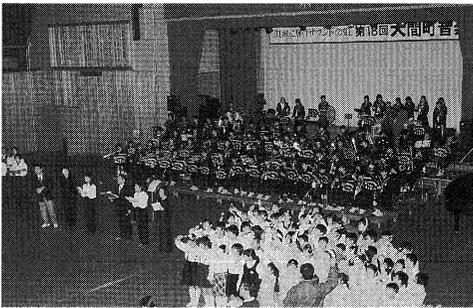


写真 8-10 大間町音楽祭



写真 8-11 はまなす駅伝大会



写真 8-12 大間町少年剣道大会

持をめぐす。

公民館活動Ⅱ地域の実情に即し、住民相互の親睦と連帯を強め、意識の向上を図るとともに、公民館活動の充実を図る。町民の憩いの場所として、集団活動、文化活動、学習の場として公民館を提供し、各種社会教育関係機関との連絡調整、各種団体・グループ活動の育成、体育・レクリエーション活動の促進、新生活運動の促進、豊かな郷土づくり、明るい家庭づくりに結び付く学習内容の検討と実施、読書意欲の向上と図書室利用の促進などを重点事項とする。

新生活運動Ⅱ社会の進展に対応しつつ、ムリ・ムラ・ムダ・ミエを省き、生活の合理化を推進し、冠婚葬祭簡

社会体育の振興Ⅱ社会体育の普及は、町民の体力づくりと健全な心身の育成という観点からも大きな意義があり、町としても施設の整備と効果的利用の促進を図り、地域住民のスポーツに対する理解と関心の高揚を図る。体育施設の整備と充実を図り、だれもがいつでも行えるスポーツ・レクリエーション活動の普及を図るとともに、明るく健康な町づくりに努める。社会体育団体の組織の充実と指導者の育成とのバランスを保ち、体育協会をはじめとする関係機関との連携を図り、その充実に努める。体育・スポーツ活動における健康と安全に留意したスポーツ活動を進め、推進を図る。

体育館活動Ⅱ地域住民の計画的・継続的な利用についての意識の高揚を図り、効果的な運営に努める。体育館の開放と関係指導者の育成と充実を図るとともに体育館施設の整備に努める。スポーツ人口の拡充を図り、体力増進・健康保

素化の問題点を把握し、その解消に努め、運動推進の助長に努める。



写真8-13 大間町公民館



写真8-14 町立公民館奥戸分館

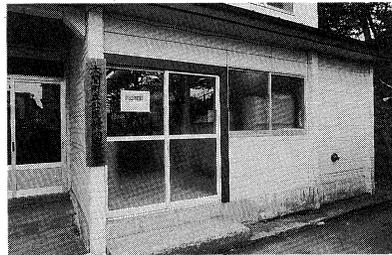


写真8-15 公民館図書室



写真8-16 大間町勤労青少年ホーム

## 第五節 教育行財政

### 一 大間町の総合教育計画

教育内容と 大間町の総合的な教育計画は、平成元年（一九八九）度に作成された。「第三次大間町総合計画 施設の整備 書」の中で、学校教育・社会教育・文化活動の三つの分野に分けて綿密に計画され、現在、強力に推進されている。

学校教育については、知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成をめざし、心身の発展段階に応じて個性と能力を伸ばし、豊かな人格形成の基盤づくりを行うために、幼児教育から義務教育、そして高等教育まで、それぞれの教育内容と学校施設の整備が重大なポイントとされている。各段階ごとの計画内容を総合的に眺めると、次のとおりである。

- ① 幼児教育Ⅱその生涯に通じる人格形成の場としての最初の段階として重要な意味を持つだけに、特に保育所施設や義務教育施設との関連を考えながら、適切な配置を進める。将来は幼児数が減少する状況に加えて行政改革の必要性からも、民間施設とのかかわり合いを考慮しながら、幼稚園教育の質的向上をめざす。
- ② 義務教育Ⅱ教育内容の充実と施設の整備を図るとともに、風土と伝統を生かし、創造力と知性に富んだた

くましい児童・生徒の育成を目標とする。また、老朽校舎の解消、学校規模の適性化、実態に即した学区の再編成などについては、地域住民との合意の上で検討を進め、教育環境の改善に取り組む。

③ 高等教育Ⅱ地域経済の要求を勘案し、一層の施設の整備と充実を図るとともに、漁業や高度情報化社会に対応したカリキュラムの充実を進める。

このような学校教育に対する積極的な取り組みの姿勢は、社会教育の分野に対しても持ち込まれ、生涯教育の中で重要視されていくべきものとして位置づけられている。そのため社会教育は、今後ますます高まると予想される町民のニーズにこたえることができるように条件整備を図り、町民の自主的な学習活動を活発に展開するための指導者の育成を図ることに力が入られる。

学習活動の場である社会教育施設については、生涯教育の拠点となる中央公民館を新設するとともに、幼児から老人までの学習要求にこたえるため、図書館機能の整備・充実を進める。また、町民の健康増進と体力向上のため、総合運動公園など体育施設の整備・充実を図るとともに、各種団体、指導者の養成にも力を入れ、町民スポーツの振興に努める。

生活の基盤整備が進み、生活水準が向上する中で、町民の文化的ニーズは高まりつつあるが、これにこたえるための文化活動の分野では、各種芸術・文化団体の助長・育成に大きな主眼が置かれる。また、文化施設の拡充・整備を進め、優れた芸術・文化に接する機会の増大を図る。さらに大間町には数多くの史跡・文化財があるところから、これらの保護・活用を進め、後世に正しく伝え残すような施設の整備を図る。

**学校教育の** もっと具体的に学校教育の現状と問題点を眺めながら、現実に推進されている大間町としての**問題と施策** 策の方向を「第三次大間町総合計画書」の中から、幼児教育・義務教育・高等教育のそれぞれの

表8-7 幼稚園の状況

名称	地区	建設年度	構造	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	備考
大間幼稚園 (旧)	大間	昭和55	木造	1,301	861 (441)*	※危険園舎面積 を示す。 平成元年8月現在
” (新)	”	平成8	”	8,837.72	521.64	平成8年計画

分野に分けて拾い上げてみよう。

(一) 幼児教育の問題点と施策の方向

幼児教育環境は近年、主婦の職場進出の増大、それに伴う共働き家庭の増加、核家族化の進行などによって、要保育の傾向は高まる一方にある。大間町における幼児教育機関は、既に述べたように公立幼稚園としての大間幼稚園（収容定員一六〇人）があり、平成七年（一九九五）現在七六人が入園している。このほか、保育施設として公立保育所が二つ（収容定員一二〇人）と私立保育園一つ（収容定員六〇人）があり、平成七年現在、それぞれ一〇九人、六〇人が入所している。これは大間町の総幼児数四六〇人に対して五三・三%の就園率となる。

大間町の町民の幼児教育に対する認識は年ごとに高まってきているため、大間町では就園奨励費補助や施設に対する運営助成を行い、幼児教育の振興を図ってきた。保育施設については、国・県の補助を受けて、施設基準に合致した整備がなされてきているが、一部には危険な園舎も見受けられるため、早急な改善の必要性も出てきている。こうした問題は、施設の老朽化など、長期間にわたれば繰り返し現れる問題だが、就学前の児童の教育に対する期待も高度なものが求められる現在、教育の機会均等の見地からも内容の整備充実と施設改善が望まれている。このようなことから大間幼稚園については、平成八年度に危険改築事業として園舎の建て替え工事に着手、平成八年度末には完成の運びとなっている。新園

表8-8 小学校校舎の整備状況

学校名	建設年度	敷地面積 (㎡)	校舎面積 (㎡)				
			必要	保有	不足	危険	改築
大間小学校	大正7	14,993	4,178	3,733	650	854	854
奥戸小学校	明治44	9,553	1,954	2,152	36	35	35
計		24,546	6,132	5,885	686	889	889

表8-9 小学校屋内運動場の整備状況

学校名	建設年度	屋内運動場面積 (㎡)					屋外運動場	プール
		必要	保有	不足	危険	改築		
大間小学校	大正7	1,092	1,222	—	0	0	13,162	—
奥戸小学校	明治44	825	826	—	0	0	3,904	—
計		1,917	2,048	—	0	0	17,066	—

舎の完成に伴い、現(旧)園舎は取り壊しとなる。

また、幼稚園と保育所との関連についても問題はあ  
る。それぞれが相互の本来の機能と役割を果たし、入  
園対象児の把握と保育措置の適正化を図る必要がある。  
このような幼児教育の現状と問題点に対する施策の  
方向を、大間町では次の四項目にして打ち出している。

① 幼児教育の充実を図るため、家庭教育学級など  
の活動を通じ、家庭内における幼児教育体制の確  
立に努める。

② 幼稚園と保育所との相互の連携を強めながら施  
設整備の改善に努め、よりよい教育環境づくりを  
推進する。

③ 多様な幼児教育需要に対応するため、長時間保  
育、未満児保育の拡大など、保育内容の充実に努  
める。

④ 教育効果の向上をめざし、幼児教育に関する指  
導者の研修を積極的に展開し、教育および保育関  
係者の資質向上を図る。

(二) 小学校教育の問題点と施策の方向

大間町には、既に述べたとおり、大間・奥戸の二地区に小学校が設置され、平成七年現在、両校合わせて学級数二〇、児童数五三九人である。施設は校舎面積が五八五平方メートル、屋内運動場面積が二〇四八平方メートルで、特に大間小学校において危険校舎と不足校舎があり、早急な建て替えに迫られている。また、両校ともプールが設置されていないため、児童は近くの海や河川を利用しての状況にあり、その建設が望まれる。

このような小学校教育の現状と問題点に対する施策の方向を、大間町では次の四項目にして打ち出している。

- ① 「たくましい大間っ子」の育成のため、体育施設・機器などの環境整備に努める。
- ② 安全かつ快適な教育環境を形成するため、老朽校舎・危険校舎・不足校舎の解消を図り、校舎や運動施設の新築・改築を推進する。

- ③ 大間・奥戸両小学校に簡易屋内プールの建設を検討する。

- ④ 屋外施設については、極力基準面積の確保に努め、地域住民への開放を前提として整備を推進する。

(三) 中学校教育の問題点と施策の方向

小学校と同じく、大間町には大間・奥戸両地区に中学が設置され、平成七年現在、両校合わせて学級数一一、生徒数二九九人である。施設は平成元年まで校舎保有面積が四二六五平方メートル、屋内運動場が七三四平方メートルだったのが、平成七年度では両校の新築完成により校舎保有面積七二九三平方メートル、屋内運動場二二九二平方メートルとなった。

平成元年現在では、校舎は木造で、しかも完成以来四〇年も経過しているため、老朽化が著しく、危険校舎・不足校舎が生じており、早急な建て替えに迫られていた。

表8-10 中学校校舎の整備状況

学校名	建設年度	敷地面積 (㎡)	校舎面積 (㎡)				
			必要	保有	不足	危険	改築
大間中学校	昭和26	52,720	3,289	2,678	611	1,807	1,807
奥戸中学校	昭和24	10,378	2,024	1,280	744	1,203	1,203
計	—	63,098	5,313	3,958	1,355	3,010	3,010

表8-11 中学校運動場の整備状況

学校名	建設年度	屋内運動場面積 (㎡)					屋外運動場	プール
		必要	保有	不足	危険	改築		
大間中学校	昭和26	1,237	木造418	819	397	397	26,478	有
奥戸中学校	昭和24	854	鉄筋960 (内クラブハウス 134)	28	0	0	13,055	無
計	—	2,091	1,378 ( 134)	847	397	397	39,553	

このような中学校教育の現状と問題点に対する施策の方向を、大間町では次のように打ち出している。

安全かつ快適な教育環境を形成するためには、老朽校舎・危険校舎・不足校舎の解消を図らなければならない。このため、大間中学校（平成四年）・奥戸中学校（平成六年）の両校校舎がそれぞれ新築完成をして、当面の問題は解消された。

(四) 高等学校教育の問題点と施策の方向  
大間町の高等学校は県立大間高等学校であり、平成七年（一九九五）現在、全日制が学級数八、生徒数二四九人、定時制が学級数四、生徒数二四人である。全日制は大間町をはじめ、風間浦村・佐井村・大畑町から通学しているが、定時制はほとんど大間町の生徒で占められている。施設は校舎はすべて鉄筋コンクリート三階建ての三八

第5節 教育行財政

表8-12 生徒数・学級数の推移

区分 年度	県立大間高校					
	生徒数			学級数		
	全日制	定時制	計	全日制	定時制	計
昭和59	389	33	422	9	4	13
60	373	33	406	10	4	14
61	418	35	453	10	4	14
62	422	34	456	10	4	14
63	430	29	459	10	4	14
平成元	403	35	438	9	4	13
2	363	35	398	9	4	13
3	333	36	369	9	4	13
4	300	21	321	9	4	13
5	264	19	283	8	4	12
6	249	22	271	8	4	12
7	249	24	273	8	4	12

(平成8年5月現在)

表8-13 高等学校の整備状況

学校名	建設年度	敷地面積 (㎡)	校舎面積 (㎡)				
			必要	保有	不足	危険	改築
県立大間高校	昭和50	67,202	—	鉄筋 3,854	0	0	0

表8-14 高等学校運動場の整備状況

学校名	建設年度	屋内運動場面積 (㎡)					屋外 運動場	プール
		必要	保有	不足	危険	改築		
県立大間高校	昭和50	—	12,673	0	0	0	50,040	—

五四平方メートル、体育館は鉄骨造りの一万二六七三平方メートルと屋外運動場の五万四〇平方メートルである。校舎・体育館・屋外運動場のいずれにも不足面積・危険面積はなく、十分整備されているため、問題点はないように思われるが、大間町では次のような四項目の施策の方向を打ち出している。

① 情報化・高度科学技術化に伴い、視聴覚教材設備およびコンピューターなど、関係教材の整備を積極的に推進する。

② 漁業など、地元産業に深く関係する分野の教育内容を強化する。

③ 郷土に関係する知識の向上を図るための教材・教具の充実に努める。

④ 就職相談の窓口を強化し、地元定着の促進を図る。

**社会教育の問題と施策** 学校教育に続いて、社会教育の面でも現状と問題点を検討し、具体的な施策の方向が打ち出される。これを社会教育施設、社会教育活動、体育・スポーツ活動、文化財保護のそれぞれの分野から拾い上げてみよう。

(一) 社会教育施設の問題点と施策の方向

社会教育活動の拠点となる施設として、大間町では町立公民館・同奥戸分館・勤労青少年ホーム・総合開発センター・農業研修センター・農村婦人の家があり、年次的にそれぞれの整備が行われている。しかし、特に町立公民館は昭和二十九年（一九五四）に建設された木造施設であるために、老朽化が著しく、早急な改善が望まれる。また、社会教育指導専門職員が不足しているため、各施設へ専門職員の配備を図るとともに、民間指導者の養成が必要である。このような現状と問題点に対して、大間町では次の二項目の施策の方向を打ち出している。

① 中央公民館の新設に当たっては、郷土館・図書館などを備えた総合文化センターとして機能強化を図る。

第5節 教育行財政

表 8 - 15 社会教育施設の状況

名 称	地区	建設年度	構造	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	施設内容
町立公民館	大間	昭和29	木造	1,980	714	ホール・和室会議室3、集会室1
町立公民館 奥戸分館	奥戸	昭和57	〃	1,540	225	
勤労青少年 ホーム	大間	昭和55	〃	3,600	747.8	運動室・講習室・集会室・図書室・音楽室
総合開発 センター	〃	昭和57	〃	4,000	1,419.9	農林漁業研修室・大集会室・研修室2・調理室・保健相談室
農業研修 センター	奥戸	昭和55	〃	930.09	456.8	集会室・研修室・調理室
農村婦人の家	材木	昭和59	〃	1,569	325.6	農産物加工実験室・教養室・学習室・保健管理室

(平成8年3月現在)

表 8 - 16 社会教育施設の年間利用状況

名 称	利用人数	備 考
町立公民館	714件	
町立公民館奥戸分館	121件	
勤労者青少年ホーム	8,423人	
総合開発センター	23,300人	
農業研修センター	7,057人	
農村婦人の家	3,236人	

(平成8年3月現在)

② 社会教育内容の多様化・高度化に対応するため、専門職員を確保し、生涯教育推進組織の整備や指導体制の確立に努める。

(二) 社会教育活動の問題点と施策の方向

社会教育活動は、少年・青年・成人の三分野に分けて考えられるが、それぞれの年代層において、それぞれの課題と問題点を抱えているのが現状である。

① 少年教育Ⅱ近年、家庭における教育条件の弱体化、社会環境の悪化など、少年の望ましい成長を疎外する要因が増加している。大間町では、少年の健全な育成を図るため、一七団体の子供会が組織されており、子供会連絡協議会および子供会育成協議会の協力のもとに、積極的な自主活動を展開している。また、野球や剣道・柔道を中心とした少年スポーツクラブが組織され、父兄などの意欲的な活動に支えられながら、少年の健全な育成に貢献している。

このような現状と問題点に対して、大間町では次の二項目の施策の方向を打ち出している。

- ⑦ 少年の社会性・自主性を育てるため、スポーツや奉仕などの集団活動を奨励し、関係団体の育成を図る。
- ④ 少年の健全育成を図るため、学校や家庭、地域と緊密な連携を保ちながら、指導体制の確立に努める。
- ② 青年教育Ⅱ成人期への準備段階にある青年期における社会教育を重要なものとして位置づけ、大間町では連合青年団・材木青年団・YMサークルが組織され、それぞれが生産活動・奉仕活動・郷土芸能活動などを積極的に展開している。しかし、職業の枠を超えて機能しているのは連合青年団だけであり、地域連帯意識の低下や人間疎外の状況を招いている。最近ではこれを補うものとして、文芸クラブ、郷土を語る会など趣味的グループが地道な活動を展開している。

このような現状と問題点に対して、大間町では次の二項目の施策の方向を打ち出している。

⑦ 地域に根ざした青年団の組織化を図るとともに、加入促進と団体指導者の育成に努める。

④ 各種団体やサークルの自主的活動を助長させるため、総合開発センター・公民館などの社会教育施設を積極的に提供し、自主活動や団体活動の推進に努める。

③ 成人教育Ⅱ成人に対する社会教育は、多様化する地域社会の中で、人間疎外や連帯意識の欠如が指摘される今日、住民相互の立場を尊重し合い、しかもゆとりのある生活の実現や学習への関心などに必要なものとして、大きな期待が寄せられている。大間町では成人各層の学習要求や地域課題に沿って、公民館・地区集会場・総合開発センター・町民体育館などの施設を中心に、家庭教育学習・婦人教育学習・高齢者学習など、各種学校講座を開設し、盛んな学習活動が行われているが、その実態は一部の参加者とどまり、活動内容も地域課題としての広がりがないことから、さらに充実した内容が望まれる。また、高齢化の進む中で、高齢者の豊かな経験が発揮されたり、世代を超えた交流ができる場の設定が必要であるとともに、生きがいのある生活を求め、活動するための条件整備も重要である。

このような現状と問題点に対して、大間町では次の二項目を施策の方向として打ち出している。

⑦ 多様化する生活課題や学習要求にこたえる豊かな人間性を育成するため、多くの町民が参加できるように各種学級・講座・研修会などの学習内容の高度化を図り、充実に努める。

④ ふるさと運動などの推進により、地域連帯の高揚を図り、明るい地域づくりを進める。

(三) スポーツ活動の問題点と施策の方向

体育・スポーツ活動は、健全な心身の発達を促し、豊かな人間性を培うとともに、健康で文化的な生活を営む

上できわめて重要な役割を果たしている。こうした中で大間町では、町民の健康づくり・体力づくりを目標に、町や体育協会が主催して町民体育大会・町内駅伝大会・野球大会・ソフトボール大会などの各種大会を開催するほか、学校体育施設の開放により、町民の体育振興に努めている。

このような現状に対する大間町の施策の方向は、次の四項目に集約できる。

- ① 身近にスポーツ活動が楽しめるよう、コミュニティスポーツの振興を促進する。
  - ② 各種スポーツ教室を積極的に開催し、自発的参加を促し、スポーツの普及と生活の中への定着を進める。
  - ③ 体育指導者の育成に努め、指導体制の強化・充実を図る。
  - ④ 北通地域三か町村で共催するスポーツ大会の充実を図る。
- (四) 文化財保護の問題点と施策の方向

近年の著しい社会の変革や開発に伴う破壊から文化遺産を保護・保存・活用して次世代に伝え残すことは重大な責務である。大間町では昭和四十六年、奥戸地区に郷土芸能保存会が結成され、大間地区にも昭和五十一年に保存会ができ、大間小唄・津軽海峡海鳴り太鼓などの発表がなされている。また、埋蔵文化財も町内各地で発掘され、大間町民俗文化財や埋蔵文化財などの貴重な資料が一般に公開されるなど、積極的な活動が行われている。埋蔵文化財については第二章、文化財については第一章で詳述しているのでここでは触れないが、大間町では文化財保護の現状に対して、次の三項目にわたる施策の方向を打ち出している。

- ① 文化財の調査・発掘・保存・活用に努め、祭りや伝統芸能を育成し、文化財保護思想の普及を図る。
- ② 消滅しようとしている民俗・文化資料の収集・保存に努め、町民が郷土の歴史や文化財に関する理解を深めるとともに、貴重な資料を次代に継承する郷土資料館の機能を公民館に併設する。

③ 点在する遺跡・史跡の調査を進め、保存に努める。

社会教育 大間町の社会教育は、年度初めに年間計画を作成し、各種会議をはじめ、部門ごとの総会・委員年間計画 会・研修会・講座・各種体育大会など、催し物のスケジュールがあらかじめ決められ、実施される(表8-18参照)。

## 二 教育予算

大間町予算の 大間町の教育関係予算は、平成六年(一九九四)度を例に取ると、大間町全体の町予算額の中の教育予算の八・四%を占めている。表8-17で見ればわかるとおり、最新年度と過去四年の教育予算を比較すると、その年度ごとの教育関係事業によって臨機応変の予算が組まれているのがわかるが、学校教育費を中心に教育総務費・社会教育費・保健体育費がバランスよく配分され、充実した内容で運営されているといっていであらう。

表8-17 教育関係予算

(平成4年度)

単位：千円

款	項	予算額	比較増減	教育費に対する割合
教育総務費		51,009	2,642	5.79%
	教育委員会費	1,490	15	0.17
	事務局費	49,519	2,627	5.62
学校教育費		780,147	470,539	88.63
	幼稚園費	36,074	1,760	4.10
	小学校費	45,550	8,164	5.17
	中学校費	698,523	460,615	79.36
社会教育費		36,536	3,202	4.15
	社会教育総務費	29,812	3,512	3.39
	公民館費	6,724	△ 310	0.76
保健体育費	保健体育総務費	12,557	16	1.43
計	教育費総額	880,249	476,399	100.00

(平成5年度)

款	項	予算額	比較増減	教育費に対する割合
教育総務費		52,931	1,922	5.59%
	教育委員会費	1,443	△ 47	0.15
	事務局費	51,488	1,969	5.44
学校教育費		822,036	41,889	86.88
	幼稚園費	39,009	2,935	4.12
	小学校費	44,527	△ 1,023	4.71
	中学校費	738,500	39,977	78.05
社会教育費		56,608	20,072	5.98
	社会教育総務費	49,110	19,298	5.19
	公民館費	7,498	774	0.79
保健体育費	保健体育総務費	14,597	2,040	1.54
計	教育費総額	946,172	65,923	100.00

第5節 教育行財政

(平成6年度)

款	項	予算額	比較増減	教育費に対する割合
教育総務費		61,571	8,640	18.3%
	教育委員会費	1,881	438	0.5
	事務局費	59,690	8,202	17.8
学校教育費		193,977	△628,059	57.9
	幼稚園費	34,970	△4,039	10.4
	小学校費	47,603	3,076	14.2
	中学校費	111,404	△627,096	33.2
社会教育費		60,062	3,454	17.9
	社会教育総務費	50,943	1,833	15.2
	公民館費	9,119	1,621	2.7
保健体育費	保健体育総務費	19,154	4,557	5.7
計	教育費総額	334,764	△611,400	100.00

(平成7年度)

款	項	予算額	比較増減	教育費に対する割合
教育総務費		67,305	5,734	24.0%
	教育委員会費	1,881	0	0.6
	事務局費	65,424	5,734	23.4
学校教育費		134,389	△59,588	48.0
	幼稚園費	36,090	1,120	13.0
	小学校費	47,869	266	17.0
	中学校費	50,430	△60,974	18.0
社会教育費		66,687	6,625	23.1
	社会教育総務費	58,601	7,658	20.3
	公民館費	8,086	△1,033	2.7
保健体育費	保健体育総務費	13,904	△5,250	4.9
計	教育費総額	282,285	△52,479	100.00

(平成8年度)

款	項	予算額	比較増減	教育費に対する割合
教育総務費		65,887	△ 1,418	23.5%
	教育委員会費	1,781	△ 100	0.6
	事務局費	64,106	△ 1,318	22.8
学校教育費		139,822	5,433	49.8
	幼稚園費	47,523	11,433	16.9
	小学校費	41,892	△ 5,977	14.9
	中学校費	50,407	△ 23	17.9
社会教育費		62,796	△ 3,891	22.4
	社会教育総務費	55,927	△ 2,674	19.9
	公民館費	6,869	△ 1,217	2.4
保健体育費	保健体育総務費	12,366	△ 1,538	4.4
計	教育費総額	280,871	△ 1,414	100.00

第5節 教育行財政

表 8 - 18 社会教育年間計画（平成六年度）

5	4	月
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「教育の広場」作成</li> <li>・ふれあい道路実行委員会</li> <li>・生涯学習まちづくり推進会議</li> <li>・14～15第6回函館・下北青年交流会（南茅部町）</li> <li>・青少年健全育成総会</li> <li>・ふれあい道路花いっぱい小委員会</li> <li>・ふれあい道路花苗植付補</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会教育委員会会議</li> <li>・文化財審議委員会</li> <li>・各種委員委嘱</li> <li>・青少年健全育成推進委員会</li> <li>・社会教育委員会</li> <li>・文化財審議委員会</li> <li>・市町村文化行政担当者会議</li> </ul>	<p>社会教育関係</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新生活運動協議会総会</li> <li>・連合青年団理事会、総会</li> <li>・高齢者教室</li> <li>・郡子ども会理事会、総会</li> <li>・公民館運営審議委員会</li> <li>・函館・下北婦人交流会打ち合わせ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奥戸秋桜サークル総会</li> <li>・大間読書サークル総会</li> <li>・大間地区婦人会総会</li> <li>・図書担当者会議</li> <li>・コールはまなす総会</li> </ul>	<p>公民館・文化関係</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会体育担当者会議（青森）</li> <li>・婦人インディアカ教室（毎週水曜13～15時）</li> <li>・体育協会総会</li> <li>・5／9町民体育大会相談役員会議</li> <li>・市町村駅伝競走大間町実行委員会設立会議</li> <li>・5／21～22県スポ少指導</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育指導委員会</li> <li>・体育館運営審議委員会</li> <li>・朝野球総会</li> <li>・朝野球リーグ戦開始</li> <li>・大間町スポーツ少年団総会</li> </ul>	<p>社会体育関係</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・5／22県内勤労青少年ホームスポーツ交流会（青森市）</li> <li>・5／1むつ下北地区春季少年剣道大会</li> <li>・5／3むつ下北地区春季少年柔道大会</li> <li>・5／30～31郡社教担当者研修会（風間浦村）</li> <li>・郡文化財審議委員会総会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4／21県勤労青少年ホーム連協総会（野辺地町）</li> </ul>	<p>その他</p>

<p>7</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「教育の広場」作成</li> <li>・7/14～15青森県社会教育研究大会</li> </ul>	<p>6</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・青少年健全育成会議委員会</li> <li>・青少年健全育成会議専門委員会</li> <li>・「教育の広場」作成</li> <li>・成人式名簿調べ</li> <li>・成人式実行委員会議</li> <li>・生涯学習まちづくり部会</li> </ul>	<p>5</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・強作業</li> <li>・5/11郡社教委員総会</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者教室</li> <li>・読書団体リーダー研修会</li> <li>・町民文化祭実行委員会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6/1～2第14回函館・下北婦人視察研修</li> <li>（恵山町）</li> <li>・高齢者教室</li> <li>・6/5県子ども会育成連合会総会</li> <li>・6/16県子連事務担当者会議</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・7/1大間中プール使用打ち合わせ会議</li> <li>・7/3生涯スポーツフェ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レクススポーツ指導者講習会（青森市）</li> <li>・体協理事会・郡体育協会総会</li> <li>・6/19第28回町民体育大会（大間小G）</li> <li>・体育指導委員会議</li> <li>・6/22～23郡体指研修会（風間浦村）</li> <li>・一町二か村体育大会打ち合わせ会議</li> <li>・県民体育大会各種予選。</li> <li>・6/22郡体育指導委員理事會、総会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・者講習会（青森）</li> <li>・5/28～29〃（八戸）</li> <li>・5/体指中央研、生涯スポーツ実技指導者講習会</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・7/24県内地区勤労青少年ホームスポーツ交流ソフトラボール大会（大間町）</li> </ul>		

第5節 教育行財政

8	7
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 青少年健全育成推進委員会議</li> <li>・ 青少年健全育成会補導部会巡回補導活動</li> <li>・ 「教育の広場」作成</li> <li>・ 成人式実行委員会議</li> <li>・ 8/15成人式</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 社会教育委員会議</li> <li>・ 健全育成空カン・ゴミ拾い運動</li> <li>・ 健全育成巡回補導活動</li> <li>・ 生涯学習まちづくり企画委員会</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 単位子ども会ネブタ運行</li> <li>・ 読書団体リーダー研修会</li> <li>・ 第35回県公民館大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7/29～30第22回函館・下北子ども交流会</li> <li>（風間浦村）</li> <li>・ 婦人学級運営委員会議</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 8/27～28第49回県民体育大会（五所川原市）</li> <li>・ 水泳教室</li> <li>・ 県民体育大会抽選会</li> <li>・ 女子体育スポーツ指導者研修会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スティバル（青森市）</li> <li>・ 7/10第1回むつ下北小学校陸上競技記録会（むつ市）</li> <li>・ 大間中プール開放</li> <li>・ 第18回青森県少年柔道大会</li> <li>・ 体協理事會</li> <li>・ 一町二か村野球大会</li> <li>・ 県スポーツ少年団野球大会</li> <li>・ 県スポーツ少年団陸上記録会</li> <li>・ 7/30第19回子どもソフトボール大会</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 朝野球郡大会</li> <li>・ 勤労青少年ホーム講座</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 家庭教育指導者研究協議会（むつ市）</li> </ul>

<p>10</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「教育の広場」作成</li> <li>・青少年健全育成推進大会</li> <li>・郡PTA指導者研修会（川内町）</li> <li>・郡青年団体指導者研修会</li> <li>・ふれあい道路街頭指導</li> <li>・10/18、19郡社教委員研修会（むつ公）</li> </ul>	<p>9</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・9/10、11県青年大会（二三八）</li> </ul>	<p>8</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・8/30県家庭教育セミナー（社教センター）</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・町民文化祭実行委員会</li> <li>・郡子連育成者指導者研修会</li> <li>・公民館運営審議委員会議</li> <li>・10/22、23第27回戸井町民文化祭</li> <li>・成人大学講座</li> <li>・高齢者教室</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町民文化祭実行委員会</li> <li>・高齢者教室</li> <li>・成人大学講座</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・県スポ少柔道大会（平内町）</li> <li>・10/2第9回はまなす駅伝大会</li> <li>・一町二か村バレーボール大会</li> <li>・10/10第4回大間町健康まつり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9/15第2回市町村対抗バレーボール大会</li> <li>・大間地区防犯少年野球大会</li> <li>・第2回市町村対抗駅伝壮行会</li> <li>・職場対抗ナイターバレーボール大会リーグ戦開始</li> <li>・9/15県下スポーツ少年団交歓体育大会剣道競技</li> <li>・体育指導委員会議</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9/15第2回市町村対抗駅伝大会</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・県青少年ホーム合同作品展（黒石市）</li> <li>・県青少年ホーム職員研修</li> <li>・青少年ホーム講座</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勤労青少年ホーム講座</li> <li>・8/27、28東北地区勤労青少年ホームジャンボリ大会（鱒ヶ沢町）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勤労青少年ホーム講座</li> <li>・8/27、28東北地区勤労青少年ホームジャンボリ大会（鱒ヶ沢町）</li> </ul>

12	11	10
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生涯学習まちづくり部会</li> <li>・「教育の広場」作成</li> <li>・家庭教育学級</li> <li>・青少年健全育成巡回補導活動</li> <li>・「青春」の発行</li> <li>・12/1～2管内社会教育担当者研修会（大間町）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「教育の広場」作成</li> <li>・生涯学習のまちづくり中央セミナー（青森）</li> <li>・郡文化財審議委員理事会および研修会</li> <li>・むつ下北地区健全育成推進会議</li> <li>・青少年健全育成補導部会、広報部会</li> <li>・家庭教育指導者研究集会</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・婦人学級</li> <li>・高齢者教室</li> <li>・公民館長研修会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・11/5～6第19回町民文化祭</li> <li>・自衛隊演奏会</li> <li>・11/13第15回大間町音楽祭（大間中体）</li> <li>・11/5～6県子ども会指導者育成者研修（大町）</li> <li>・11/23第14回子ども会ソフトラレーボール大会</li> <li>・11/24県立図書館巡回高齢者教室</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・12/4第4回大間町ドッジボール大会（大間中体育館）</li> <li>・少年剣道大会申込締切</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一町二か村バスケットボール大会</li> <li>・大間町少年剣道大会打ち合わせ</li> <li>・11/県スポーツサミット（青森市）</li> <li>・11/20第8回大間町少年柔道大会（奥戸中体）</li> <li>・郡ママさんバレーボール大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・郡体育指導委員視察研修</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・青少年ホーム講座</li> <li>・下北郡婦人幹部研修会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・むつ下北地区健全育成推進会議</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青少年ホーム講座・下北美術展開催</li> <li>・むつ下北合唱連盟発表会</li> <li>・県青少年健全育成大会</li> <li>・むつ下北地区健全育成推進会議</li> </ul>

<p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「教育の広場」作成</li> <li>・県青少年健全育成推進会議</li> <li>・2/19第13回大間町青少年健全育成推進大会</li> </ul>	<p>1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・青少年健全育成巡回補導活動</li> <li>・「教育の広場」作成</li> <li>・家庭教育学級</li> <li>・1/28県高校生ボラントイアの集い（青森市）</li> <li>・成人大学講座</li> <li>・青少年健全育成会議委員会</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・婦人学級</li> <li>・高齢者教室</li> <li>・2/5第9回下北地区子ども会芸能発表大会（文化会館）</li> <li>・家庭教育学級</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・婦人学級</li> <li>・1/9第23回大間町書き初め席書大会（大間中体、奥戸中体）</li> <li>・書き初め審査会</li> <li>・家庭教育学級</li> <li>・1/14、16書き初め展示会</li> <li>・高齢者教室</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生涯スポーツ指導者研究会</li> <li>・町内職場対抗ナイターバスケットボール大会リーグ戦</li> <li>・郡体育指導委員会理事会</li> <li>・少年剣道練成大会（三沢大会）</li> <li>・県スポーツ少年団担当者会議</li> <li>・県体育協会理事会、評議員会</li> <li>・少年剣道浪岡大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1/22第31回大間町少年剣道大会（大間中体育館）</li> <li>・青壮年ナイタースポーツ大会（バレー、バスケットボール）</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・勤労青少年ホーム講座開講</li> <li>・県社会教育担当者会議</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青少年ホーム講座</li> <li>・郡社会教育担当者理事会</li> </ul>



柳森傳次郎	昭和三〇・五・四	昭和三一・九・三〇	(議会議選出)
岸原輝太郎	三〇・五・三一	三一・九・三〇	
碓谷武志	三〇・五・三一	三一・九・三〇	
石澤 徹	三一・一〇・一	四五・四・三〇	
益城孝蔵	三一・一〇・一	三五・一〇・一	
西村光雄	三一・一〇・一	三六・二・二八	
遠藤賢治	三一・一〇・一	三七・九・三〇	
高橋利助	三一・一〇・一	四一・一二・二四	
荒木長一郎	三五・一〇・一	四九・九・三〇	
	五三・一二・一九	五五・九・三〇	
真柄豊三郎	三六・九・二五	五八・九・三〇	
木村武三	三八・一〇・二五	四五・九・三〇	
安東 薫	四一・一二・二四	四四・一二・一八	
米澤菊市	四四・一二・一九	五五・九・三〇	
安渡秀秋	四五・一〇・一	四八・一〇・六	
古畑靈泉	四五・一〇・一	六三・一二・一五	
木村 功	四九・一〇・一七	五三・一一・一	
森 寿悦	四九・一・九	五七・八・三一	

歴代教育委員長

鹿角幹夫		昭和五五・一〇・	四}	昭和六三・一〇・	三
堺 正義		五五・一〇・	四}	六三・一〇・	三
熊谷正之		五八・一〇・一七}	現在		
増山長太郎		五八・一〇・一七}	現在		
米澤明男		六三・一〇・	四}	現在	
島 謙次		六三・一〇・	四}	現在	
宮野次郎		六三・一二・二四}	現在		
石澤 徹	昭和三一・一〇・	一}	昭和三二・	四・	一
益城孝藏	三二・	五・	一}	三五・一〇・	一
高橋利助	三五・一〇・	一}	三九・	九・三〇	
荒木長一郎	三九・一〇・	一}	四六・	九・三〇	
真柄豊三郎	四六・一〇・	一}	五〇・	九・三〇	
木村 功	五〇・一〇・	一}	五三・	一一・	一
荒木長一郎	五三・一二・一九}		五五・	九・三〇	
真柄豊三郎	五五・一〇・	四}	五七・	七・二七	
鹿角幹夫	五七・一〇・	一}	五九・	九・三〇	

熊谷正之

昭和五九・一〇・一 一 昭和三二・一〇・一九

増山長太郎

六二・一〇・一九 一 六三・一〇・七

熊谷正之

六三・一〇・七 一 現在

歴代教育長

金澤幹三

昭和二七・一一・一 一 昭和三二・四・三〇 (助役業務)

石澤 徹

三二・五・一 一 四五・四・三〇

安渡秀秋

四五・一〇・一 一 四八・一〇・六

森 寿悦

四九・一・九 一 五七・八・三一

堺 正義

五八・一一・一八 一 六三・一〇・三

米澤明男

六三・一〇・七 一 現在